

# 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 9

1999. 3

徳島市教育委員会

# 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 9

1999. 3

徳島市教育委員会

# 序 文

市内を東西に貫く大河・吉野川と眉山の豊かな緑に象徴されるまち・徳島市には、悠久の歴史を証す文化遺産が数多く遺存しております。

近年の都市開発事業の波はこれらの文化遺産にも大きな影響を与えていますが、発掘調査により明らかにされます数々の埋蔵文化財からは、かつて徳島の地に生活した人々の心を読み取ることができます。過去の人々が私たち現代人に残したさまざまな心象を学び受け継ぐことは、歴史・文化・自然を生かした創造性の高いまちづくりに通ずるものと思われま

本市では、開発と文化財保護の両者を円滑に調和すべく発掘調査を実施しており、多大な成果を得ています。

本書は発掘調査の成果を一冊の報告書としてまとめたものですが、生涯学習および歴史教育、さらには学術研究の場に微力なりとも寄与することができれば、幸甚かと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御理解と御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

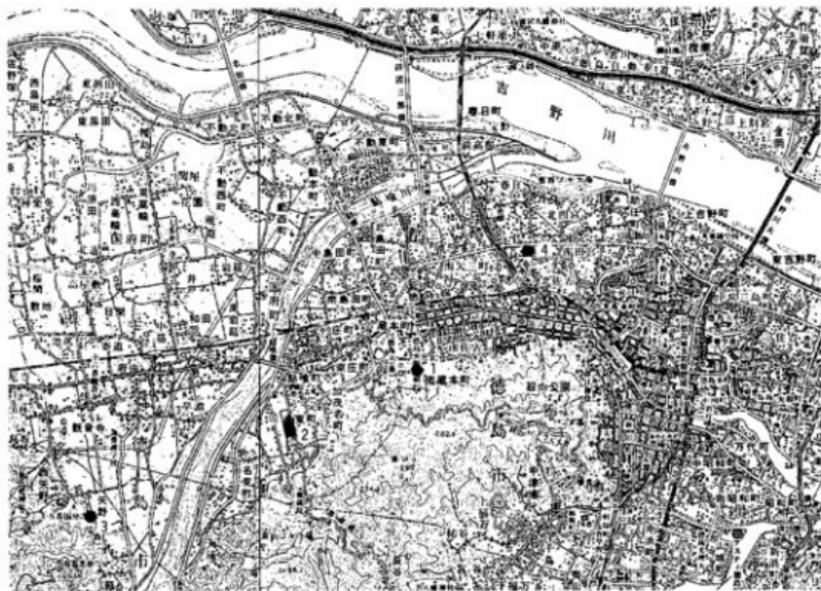
平成11年3月31日

徳島市教育委員会

教育長 柏木雅雄

## 例 言

- 1 本書は平成8～9年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した緊急発掘調査の内、4遺跡4件についての概要報告書である。
- 2 報告の対象となった遺跡名、調査場所、調査期間、調査地については抄録に記載した。
- 3 発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。
- 4 出土遺物、図面、写真の整理等報告書作成に関する作業において、下記の方々のご協力を得た。  
調査員 佐伯 俊裕、高木 淳、市川 欣也、倉佐 晃次、中野 勝美  
調査補助員 山口 文子、折野 絵美、青木 健司、吉田 祐子、露口 啓子
- 5 本書に収録した遺物および記録類は、すべて徳島市教育委員会社会教育課において収録、保管する。
- 6 本書の作成には調査担当者が分担して執筆し、目次にその文責を明らかにした。なお編集は勝浦康守が行った。



調査地位位置図 (国土地理院発行 1/50,000「徳島」[川島]縮尺使用)  
1 南蔵本遺跡 2 名東遺跡 3 阿波国分寺跡 4 田宮遺跡

# 目 次

序文

例言

目次

本文目次

- I 南蔵本遺跡（住宅開発工事）……………（勝浦康守）…………（1）
- II 名東遺跡（住宅開発工事）……………（勝浦）…………（27）
- III 阿波国分寺跡（大師堂建設工事）……………（三宅良明）…………（43）
- IV 田宮遺跡（店舗建設工事）……………（勝浦）…………（53）

挿図図版

写真図版

## 挿図図版

### I 南蔵本遺跡 (住宅開発工事)

- 第1図 調査地位位置図
- 第2図 調査地概略図
- 第3図 遺構配置図・断面図
- 第4図 溝SD03(1~3)、土壙SK21(4~7)、SK23(8、9)、SK14(10、11)出土遺物
- 第5図 土壙SK14遺物検出状況図
- 第6図 土壙SK14出土遺物
- 第7図 土壙SK27(15~19)、SK28(20)、SK32(24)、SK36(21~23)、SK38(25)、SK39(26)出土遺物
- 第8図 土壙SK29出土遺物
- 第9図 土壙SK23(35)、SK36(36)出土遺物
- 第10図 土器棺墓SI01
- 第11図 土器棺墓SI01出土遺物
- 第12図 土器棺墓SI02
- 第13図 土器棺墓SI02出土遺物
- 第14図 土壙SK04・SK05
- 第15図 土壙SK04出土遺物
- 第16図 土壙SK04出土遺物
- 第17図 土壙SK04(65~68)、SK05(69~74)SK20(75~78)出土遺物
- 第18図 土壙SK10(79~86)、SK40(87~90)出土遺物

### II 名東遺跡 (住宅開発工事)

- 第1図 調査地位位置図
- 第2図 調査地概略図
- 第3図 遺構配置図・断面図

- 第4図 竪穴住居跡SA01
- 第5図 竪穴住居跡SA01(1~4、7、8)、炉跡SC01(5)、SP13(6)出土遺物
- 第6図 竪穴住居跡SA01出土遺物
- 第7図 竪穴住居跡SA02
- 第8図 竪穴住居跡SA02出土遺物
- 第9図 竪穴住居跡SA02出土鉄鍬
- 第10図 土壙SK02出土遺物
- 第11図 土壙SK02出土遺物
- 第12図 溝SD04(40)、SD05(44)、SD06(41、42)、SD07(43)、土壙SK14(45~49)、Pit118(52)、Pit119(50、51)出土遺物

### III 阿波国分寺跡 (大師堂建設工事)

- 第1図 調査地位位置図
- 第2図 検出遺構図・堆積土層図
- 第3図 暗渠SD01
- 第4図 出土遺物(1)(1~6:溝SD02、7、8:包含層)
- 第5図 出土遺物(2)

### IV 田宮遺跡 (店舗建設工事)

- 第1図 調査地位位置図
- 第2図 調査地概略図
- 第3図 包含層(4層)出土遺物
- 第4図 遺構配置図・断面図
- 第5図 Pit01(12)、Pit02(13)、Pit03(14)、土壙SK01(18)、SK02(15~17)、溝SD02(19~25)、SD04(26~28)出土遺物

## 写真図版

### I 南蔵本遺跡 (住宅開発工事)

- 図版1 遺構検出状況
- 図版2 上:土壌 SK14遺物検出状況  
下:土壌 SK14遺物検出状況
- 図版3 上:土壌 SK23遺物検出状況  
下:土壌 SK23遺物検出状況
- 図版4 上:土壌 SK29、SK32遺物検出状況  
下:土壌 SK29、SK32遺物検出状況
- 図版5 上:土器棺墓 SI01  
下:土器棺墓 SI01
- 図版6 上:土器棺墓 SI02  
下:土器棺墓 SI02
- 図版7 上:土器棺墓 SI02  
下:土器棺墓 SI02
- 図版8 上:土器棺墓 SI02  
下:土器棺墓 SI02
- 図版9 上:土壌 SK04、SK05検出状況  
下:土壌 SK04、SK05検出状況
- 図版10 溝 SD03(1~3)、土壌 SK21(4~7)、SK23(8、9)出土遺物
- 図版11 土壌 SK14出土遺物
- 図版12 土壌 SK14出土遺物
- 図版13 土壌 SK14出土遺物
- 図版14 土壌 SK27(15)、SK28(16~19)、SK36(21~23)出土遺物
- 図版15 土壌 SK18(20)、SK32(24)、SK38(25)、SK39(26)出土遺物
- 図版16 土壌 SK29出土遺物
- 図版17 土壌 SK29出土遺物

- 図版18 土壌 SK23(35)、SK36(36)、土器棺墓 SI01(37)出土遺物
- 図版19 土器棺墓 SI02出土遺物
- 図版20 土器棺墓 SI02出土遺物
- 図版21 土壌 SK04出土遺物
- 図版22 土壌 SK04出土遺物
- 図版23 土壌 SK04出土遺物
- 図版24 土壌 SK04出土遺物
- 図版25 土壌 SK04出土遺物
- 図版26 土壌 SK04(66~68)、SK05(69~74)、SK20(75~78)出土遺物
- 図版27 土壌 SK10出土遺物
- 図版28 土壌 SK40出土遺物

### II 名東遺跡 (住宅開発工事)

- 図版1 遺構検出状況
- 図版2 上:竪穴住居跡 SA01検出状況  
下:竪穴住居跡 SA01検出状況
- 図版3 上:竪穴住居跡 SA01遺物検出状況  
下:竪穴住居跡 SA01遺物検出状況
- 図版4 上:竪穴住居跡 SA01遺物検出状況  
下:竪穴住居跡 SA01遺物検出状況
- 図版5 上:竪穴住居跡 SA01内 SP01根石検出状況  
下:竪穴住居跡 SA01内 SP02根石検出状況
- 図版6 上:竪穴住居跡 SA02検出状況  
下:竪穴住居跡 SA02検出状況
- 図版7 上:竪穴住居跡 SA02内炉跡 SC01

- 検出状況
- 下：竪穴住居跡 SA02遺物検出状況
- 図版 8 上：土壌 SK02遺物検出状況  
下：土壌 SK02遺物検出状況
- 図版 9 上：土壌 SK02遺物検出状況  
下：土壌 SK02遺物検出状況
- 図版 10 上：土壌 SK02遺物検出状況  
下：土壌 SK02鉄屑片検出状況
- 図版 11 上：溝群跡検出状況  
下：溝群跡検出状況
- 図版 12 竪穴住居跡 SA01（1～4、7、8）、炉跡SC01（5）、SP13（6）出土遺物
- 図版 13 竪穴住居跡 SA01出土遺物
- 図版 14 竪穴住居跡 SA02出土遺物
- 図版 15 竪穴住居跡 SA01（14、15）、SA02（25）出土遺物
- 図版 16 土壌 SK02出土遺物
- 図版 17 土壌 SK02出土遺物
- 図版 18 溝SD04（40）、SD05（44）、SD06（41、42）、SD07（43）、土壌SK14（45～49）、Pit118（52）、Pit119（51）出土遺物

### Ⅲ 阿波国分寺跡（大師堂建設工事）

- 図版 1 上：暗渠 SD01検出状況  
下：暗渠 SD01（蓋石の一部と埋土を除去した状況）
- 図版 2 上：暗渠 SD01西側壁  
下：暗渠 SD01東側壁
- 図版 3 上：国分寺庭園排水口（遠景）  
下：国分寺庭園排水口（近景）
- 図版 4 上：遺構検出状況（第1遺構面）

- 下：柱穴 SP29、柱穴 SP30
- 図版 5 上：溝 SD02検出状況（第2遺構面）  
下：溝 SD02遺物出土状況（第2遺構面）
- 図版 6 上：溝 SD02  
下：溝 SD02
- 図版 7 上：弥生土器・叩石出土状況  
下：叩石出土状況（弥生土器を取り上げた状態）
- 図版 8 出土遺物（1）
- 図版 9 出土遺物（2）

### Ⅳ 田宮遺跡（店舗建設工事）

- 図版 1 上：調査地Ⅰ区遺構検出状況  
下：溝 SD04検出状況
- 図版 2 上：溝 SD04壁面土層堆積状況  
下：溝 SD01～03検出状況
- 図版 3 上：調査地Ⅱ区遺構検出状況  
下：遺構検出状況
- 図版 4 上：溝 SD01～03検出状況  
下：Pit03遺物検出状況
- 図版 5 包含層（4層）出土遺物
- 図版 6 Pit01（12）、Pit02（13）、Pit03（14）、土壌 SK01（18）、SK02（15～17）、溝 SD02（19～25）、SD04（26～28）出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	とくしましまいざうぶんかざいほくつちようさがいよう						
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要						
副書名							
巻次	9						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	勝浦康守・三宅良明						
編集機関	徳島市教育委員会						
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 Tel. 088-621-5418						
発行年月日	西暦 1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	緯 緯	東 経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
南蔵本遺跡	徳島県徳島市 南蔵本町	36201	34度 4分 10秒	134度 31分 12秒	19960601～ 19960731	240	住宅開発 に伴う 事前調査
名東遺跡	徳島県徳島市 名東町	36201	34度 3分 45秒	134度 30分 14秒	19970401～ 19970531	260	住宅開発 に伴う 事前調査
阿波 国分寺跡	徳島県徳島市 国分町	36201	34度 3分 10秒	134度 28分 31秒	19960205～ 19960301	50	大師堂建 設に伴う 事前調査
田宮遺跡	徳島県徳島市 南田宮町	36201	34度 3分 57秒	134度 32分 13秒	19971101～ 19971130	100	店舗建設 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
南蔵本遺跡	集落跡	弥生	土壇・土壇墓・溝		弥生土器・石包丁		
名東遺跡	集落跡	弥生・中世	堅穴住居跡・土壇 溝・土壇墓		弥生土器 石包丁・鉄鍬 瓦器椀・小皿 東播系練鉢・白磁碗 瓦質羽釜・練鉢		
阿波 国分寺跡	寺院跡	弥生・古代 近世	溝(暗渠) 掘立柱建物跡		弥生土器・石斧 須恵器・土師器 瓦・甍		
田宮遺跡	集落跡	中世・近世	溝・土壇墓 ピット		瓦器椀 土師器坏・鍋・羽釜 東播系練鉢・陶磁器		

# 南蔵本遺跡 (住宅開発工事)

## 1 調査に至る経緯と経過 (第1・2図)

南蔵本遺跡は旧鮎喰川水系が形成した標高T.P.+3.8mを測る沖積地上に位置し、徳島大学医学部構内を中心に広がる庄・蔵本遺跡に南接する弥生時代前期～中近世に至る集落遺跡である。庄・蔵本遺跡は旧鮎喰川水系の遺跡群において、いち早く弥生集落を構成する遺跡として認識されており、近年、徳島大学埋蔵文化財調査室が医学部構内において施設建替工事に伴う調査を継続的に実施しており、弥生集落については、大規模な前期の環濠集落を想定している。<sup>1)</sup>

一方、南蔵本遺跡は庄・蔵本遺跡に南接し、眉山山裾までの狭小な範囲に位置し、弥生集落の経営については、庄・蔵本遺跡と同様に前期中葉～中期初頭にかけての限定的な様相が強く、本来的には庄・蔵本遺跡で確認されている弥生集落と同一視されるべきものかもしれない。

南蔵本遺跡における調査次数は数多くはないが、前述したような弥生時代前期に関する集落の様相を断片的に表している。庄・蔵本遺跡をも含めたこの地域における弥生集落を復原する上で、南蔵本遺跡は大きな意味を持つ集落である。

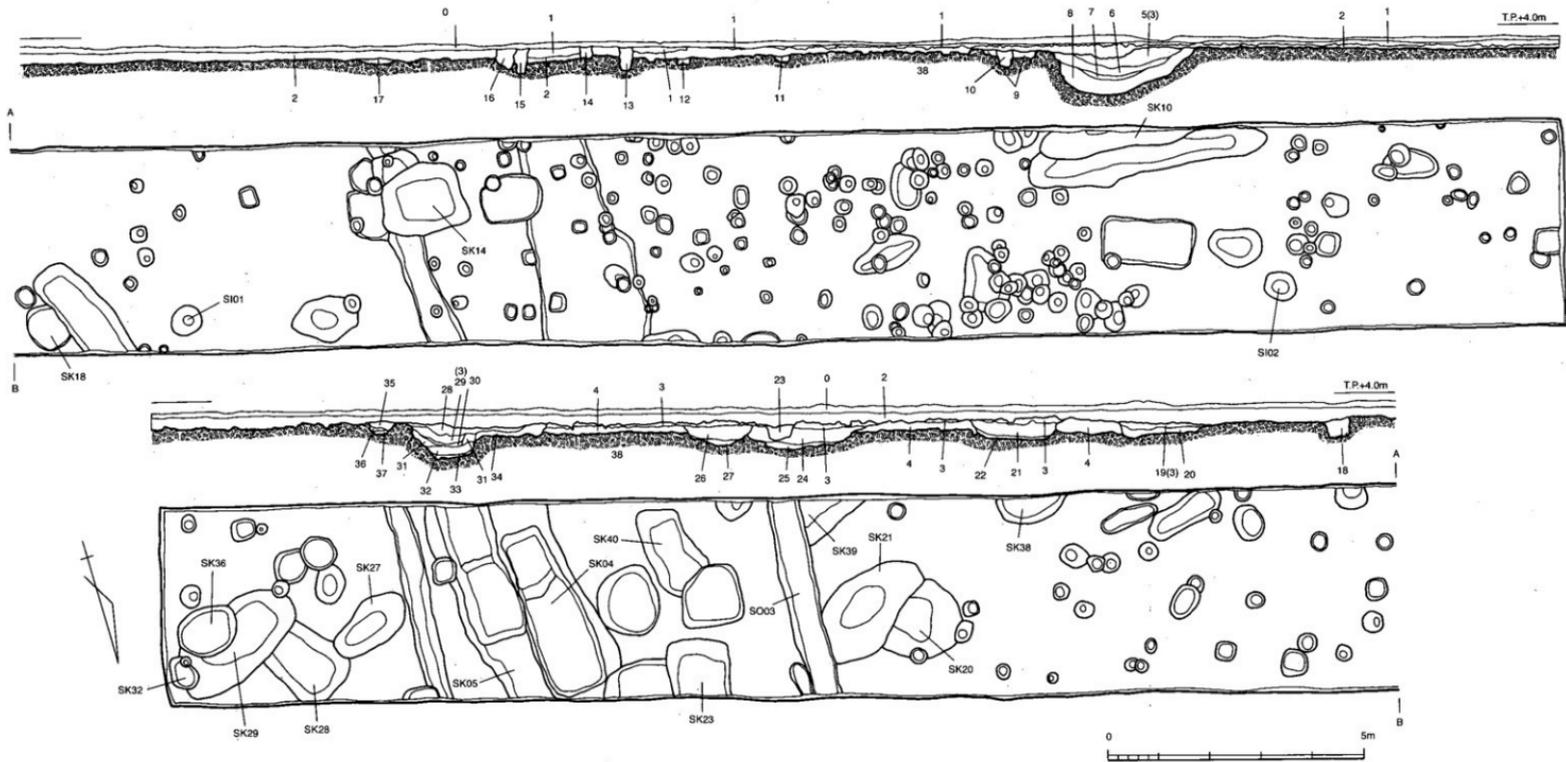
調査は住宅開発工事に伴うものである。1993年には今回の調査地から北へ20m隔てた場所において、排水路建設工事に伴う発掘調査<sup>2)</sup>の実施があり、当地においても、弥生集落の一面に位置する可能性が高いことが想定された。試掘調査において、遺構、遺物の存在を確認すると共に、宅地造成に伴う進入道路部 (幅4m×延長60m)において調査を実施した。



第1図 調査地位置図



第2図 調査地概略図



- |                                       |                       |                             |                              |                       |
|---------------------------------------|-----------------------|-----------------------------|------------------------------|-----------------------|
| 0 : 厩代水田耕作土                           | 9 : 黒褐色砂質シルト(遺構埋土)    | 18 : 褐色シルトに黄色シルトの混在 (Pit埋土) | 26 : 褐色砂質シルト                 | 34 : 褐色砂質シルト          |
| 1 : 灰白色砂質シルト(遺構層)                     | 10 : 黄色砂質シルト (Pit埋土)  | 19(3) : 黄色細砂質シルト (遺構埋土)     | 27 : 黒褐色シルトに黄色シルトの混在         | 35 : 褐色砂質シルト          |
| 2 : 黄灰色シルト(遺物貯金庫)                     | 11 : 黄褐色砂質シルト (Pit埋土) | 20 : 灰黄褐色砂質シルト (遺構埋土)       | 28 : 灰黄褐色砂質シルト (SK04・05共通埋構) | 36 : 褐色砂質シルトに黄色シルトの混在 |
| 3 : 黄色細砂質シルト(遺物貯金庫および遺構埋設遺構において上位を層す) | 12 : 黄褐色砂質シルト (Pit埋土) | 21 : 褐色砂質シルトにシリシルト (SK38埋土) | 29(3) : 黄褐色粘土質シルト            | 37 : 浅黄色砂質シルト         |
| 4 : 黄褐色砂質シルト(遺物貯金庫・2と併用・4-1-2は互閉的の構造) | 13 : 黄褐色シルト           | 22 : 黒褐色シルト                 | 30 : 灰黄色粘土質シルト               | 38 : 黄色細砂質シルト〜シルト質粘土  |
| 5(3) : 黄色粘土質シルト                       | 14 : 黄褐色砂質シルト (Pit埋土) | 23 : 灰黄褐色砂質シルト (SD03埋土)     | 31 : にぶい黄色シルト                |                       |
| 6 : 灰オリーブ色シルト質粘土                      | 15 : オリーブ褐色砂質シルト      | 24 : 灰黄褐色砂質シルト              | 32 : 灰黄色粘土質シルト               |                       |
| 7 : 褐色シルト質粘土 (焼土)                     | 16 : 褐色砂質シルト          | 25 : 黒色粘土質シルト               | 33 : 深黄色粘土質シルトに黒褐色シルトのブロック混在 |                       |
| 8 : 黄灰色シルト質粘土に黄色シルト質粘土の混在 (SK埋土)      | 17 : 黄灰色砂質シルト(溝埋土)    |                             |                              |                       |

第3図 遺構配置図・断面図

## 2 基本層序 (第3図)

調査地周辺の現地表面は標高 T.P.+3.8m を測り、現代水田耕土層下に 1～5 層が堆積する。以下、上位より概略する。

- 1: 層厚 10cm を測る灰白色砂質シルトである。本来、1 層より上位に存在したであろう水田耕作土層と 2 層との攪拌層である。
- 2: 層厚 10cm を測る黄灰色シルトである。弥生時代の遺物包含層である。
- 3: 層厚 5～10cm を測る黄色細砂～シルトである。調査地の低位部および遺構埋没過程の最上位に堆積が見られる。旧河川の沖積作用に伴う凹地への自然堆積層と考えられる。調査地東部においては遺物検出ベース層となる。
- 4: 層厚 15cm を測る褐色砂質シルトであり、弥生時代の遺物包含層である。調査地の東部ににおいて、下層 (5 層) が地形的に低下する箇所に堆積が見られる。
- 5: 黄色細砂～シルト～シルト質粘土であり、遺物検出ベース層である (第 3 図-38 に該当・3 層と同様、旧河川の沖積作用に伴う堆積層である。

## 3 検出遺構と出土遺物 (第3図、図版1)

基本層序において概略したとおり、調査地における遺構検出面は 3 層および 5 層上面が該当する。調査地西部では 5 層上面が遺構検出面となるが、地形的に低位となる東部では、4 層を挟んで堆積する 3 層上面も遺構検出面となる。4 層→3 層の堆積は比較的短期間に進行することにより平坦化するものと考えられる。3 層および 5 層上面において、土塹・土器棺墓・土塹墓・溝・ピットを検出している。以下、主な遺構、遺物について概略する。

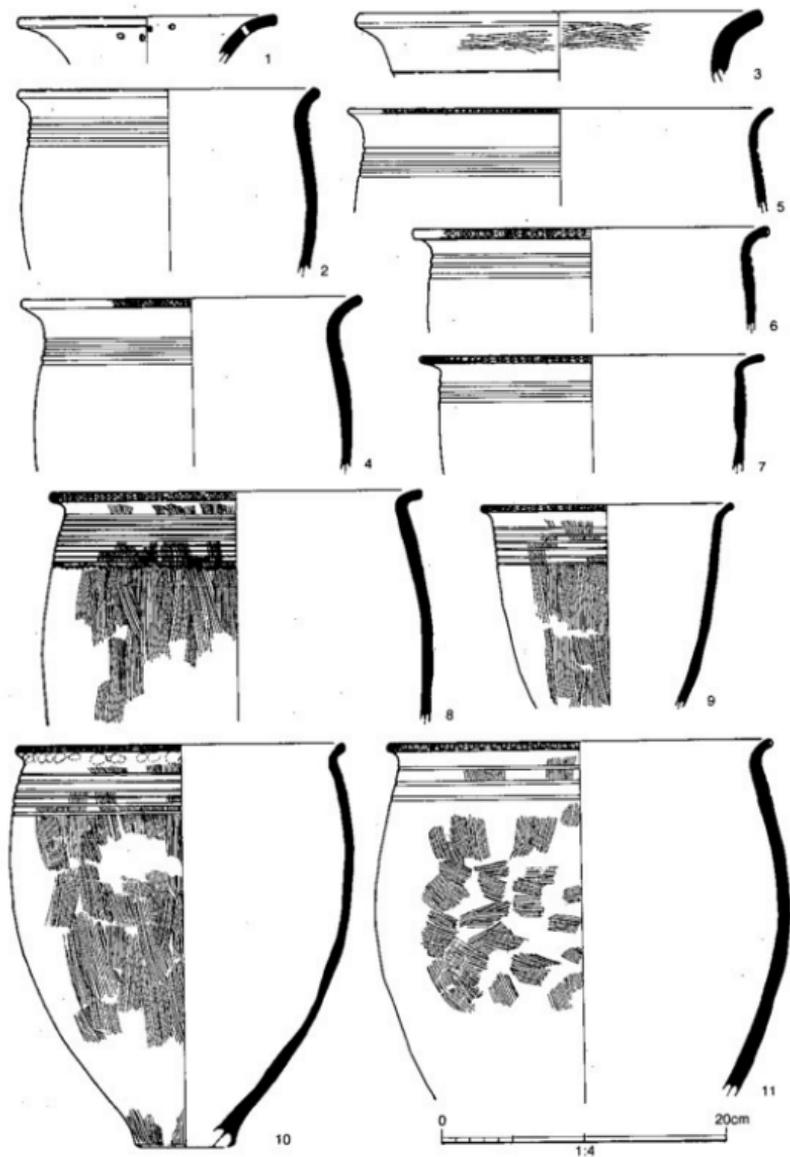
### (1) 溝

#### ① 溝 SD03 (第 3、4 図、図版 10)

幅 70cm、深さ 15cm、断面形が逆台形を呈する南北方向の溝である。出土遺物には壺 (1、3)、甕 (2) がある。

壺 1 は口縁部片であり 2 個 1 対の紐通し用の穿孔を受ける。3 は口頸部に貼付による段を持つ。口縁部内外面共に横位ヘラミガキが施される。

甕 2 は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。頸部には 4 条沈線が施される。口唇部に刻目は施されない。



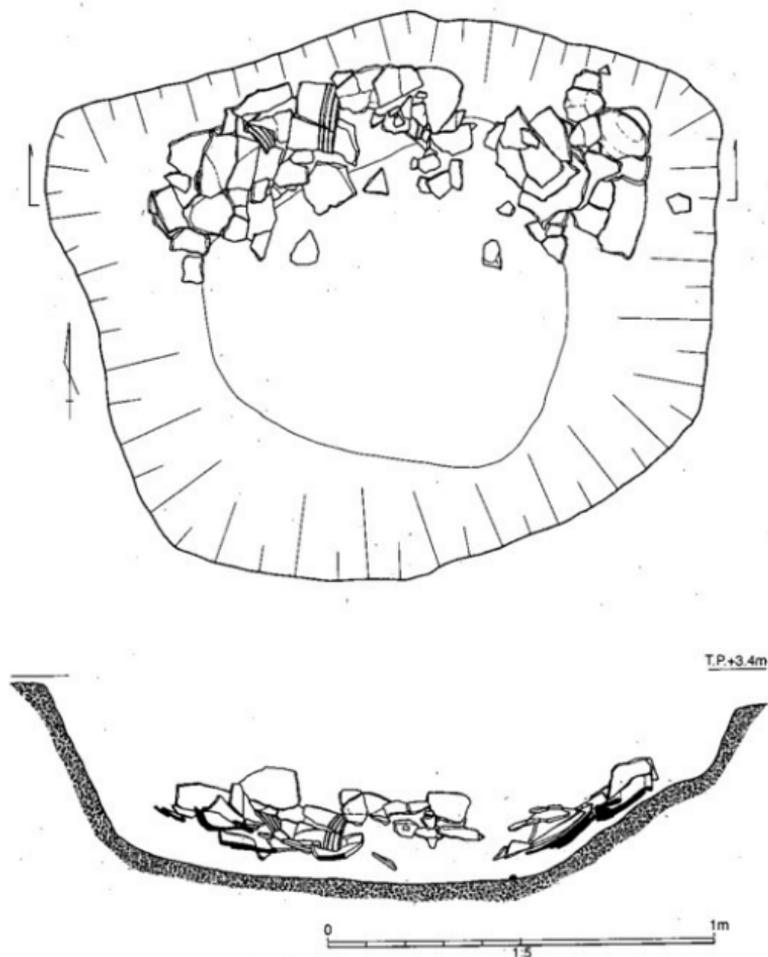
第4図 溝SD03(1~3)、土坑SK21(4~7)、SK23(8、9)、SK14(10、11)出土遺物

(2) 土壇

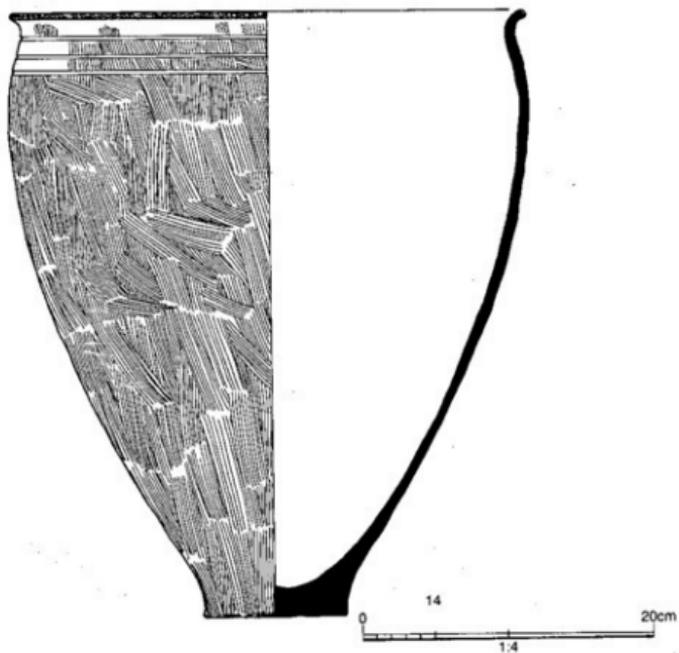
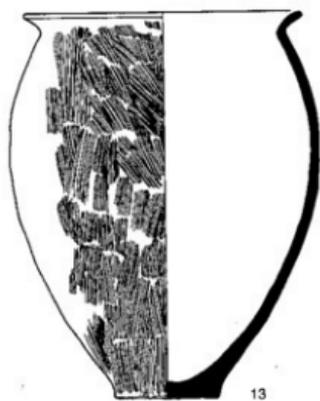
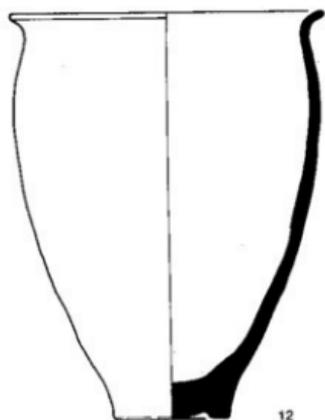
① 土壇SK14 (第3～6図、図版2、11～13)

長辺1.6m、短辺1.4mの平面形が長方形を呈し、深さ60cmを測る土壇である。土壇の北側1/2の底部に遺物が集中して検出されている。単なる廃棄土壇としての性格とは異なるものと考えられる。出土遺物には甕(10～14)がある。

甕10は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に6条沈線、体部外



第5図 土壇SK14遺物検出状況図



第6圖 土甕SK14出土遺物

面には縦位ハケが施される。11は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線、体部外面には不定方向に断続的なハケが施される。12は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。底部には輪状の粘土紐の貼付けによるが、完全な平底ではない。口唇部の刻目および頸部は無文である。13は体部最大径が中位付近まで下がり、体部に膨らみを持ち、「く」の字状に短く外反する口縁部を持つ。体部外面に縦位の断続的なハケが施される。14は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線、体部外面には縦位ハケが施される。

#### ② 土壙 SK20 (第3、17図、図版26)

土壙 SK21により破壊されているが、長径1.8m、短径1.2m(+α)の平面形が長円形を呈し、深30cmを測る土壙である。出土遺物には甕(75~78)がある。

甕75は頸部が直立し如意形口縁を呈する。頸部に5条沈線、体部外面に縦位ハケが施される。口唇部に刻目は施されない。76は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に2条沈線が施され、体部外面に縦位ハケが施される。77は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に2条沈線が施される。78は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線が施される。

#### ③ 土壙 SK21 (第3、4図、図版10)

長径2.6m、短径1.5mの平面形が長円形を呈し、深さ50cmを測る土壙である。底部に板状に加工した結晶片岩が敷かれている。出土遺物には甕(4~7)がある。

甕4、5は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。4は口唇部全面、5は口唇部下端に刻目が施される。いずれも頸部に4条沈線が施される。6は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施される。7は頸部が直立し如意形口縁を呈するが、屈曲が明瞭である。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施される。

#### ④ 土壙 SK23 (第3、4、9図、図版3、10、18)

長辺1.2m(+α)、短辺1.2mの平面形が長方形を呈し、深さ50cmを測る土壙であり、調査地外へ広がる。壁面が直立し、底部が平坦であることから、土壙墓の可能性がある。出土遺物には甕(8、9)、石包丁(35)がある。

甕8は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に10条沈線、沈線下に爪形刺突文が施される。体部外面には縦位ハケが施される。9は斜上方に直線的に立ち上がる体部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に6条沈線、体部外面に縦位ハケが施される。

石包丁35は直線刃半月形を呈する。残存刃部長13.5cm、最大幅4.0cm、厚さ0.6cmを測る。刃部、端部、背部を部分的に欠損する。背部および刃部研磨は体部研磨に角度をもってなされる。また、体部研磨は研磨以前の表面をすべて消しえていない。紐孔は2つ、背部から離れて刃部寄りに穿たれている。

⑤ 土壙 SK27 (第3、7図、図版14)

長径1.6m、短径90cmの平面形が長円形を呈し、深さ25cmを測る土壙である。出土遺物には壺(19)、甕(15~18)がある。

壺19は頸部が直立する広口壺であり、頸部に4条沈線、口頸部外面には縦横位ヘラミガキが施される。

甕15は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に6条沈線が施される。16は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施される。17は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線、体部外面には縦位の断続的なハケが施される。18は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線が施される。

⑥ 土壙 SK28 (第3、7図、図版14)

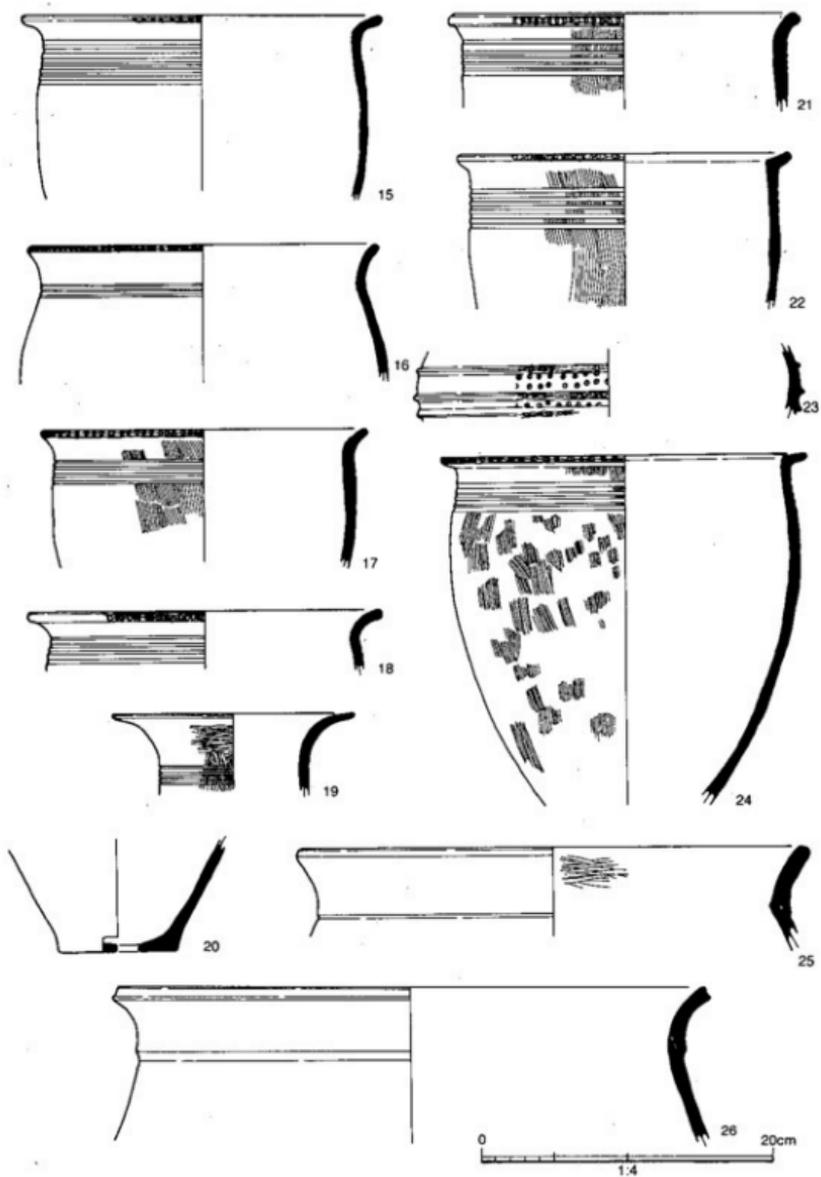
長辺2.3m、短辺1.2mの平面形が長方形を呈し、深さ50cmを測る土壙である。出土遺物には甕(20)がある。20は底部穿孔である。

⑦ 土壙 SK29 (第3、8図、図版4、16、17)

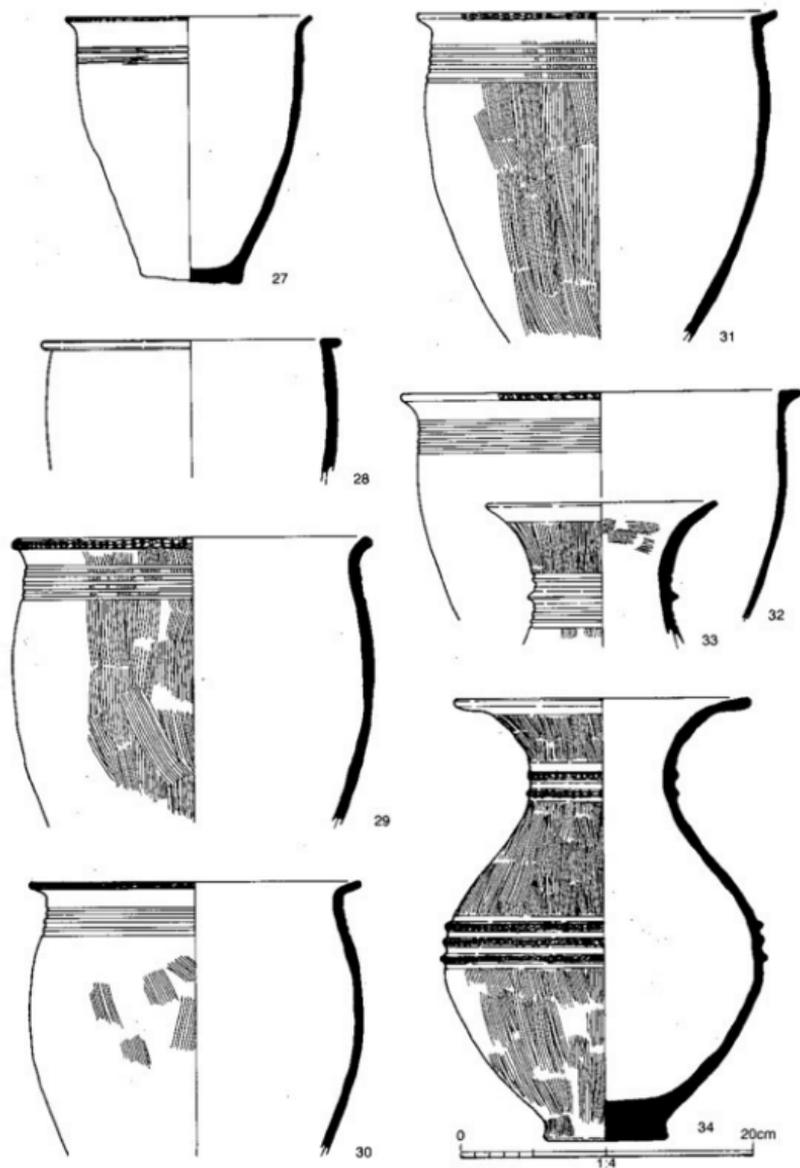
長径2.7m、短径1.3mの平面形が長円形を呈し、深さ35cmを測る土壙であり、出土遺物には、甕(27~32)、壺(33、34)がある。

甕27は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線が施される。28は頸部が直立し口縁部上端に粘土紐を貼付け、「L」字状口縁を呈する。29は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に5条沈線が施される。体部外面には縦位の断続的なハケが施される。30は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線、体部外面には縦位ハケが施される。31は頸部がわずかに内弯し、「L」字状口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に5条沈線、体部外面には縦位ハケが施される。32は頸部が直立し、口縁部は「L」字状を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に5条沈線が施される。

壺33は頸部の1条貼付突帯を境界に、上位に2条、下位に3条の沈線が施される。口縁部外面には縦位ハケが施される。34は口縁部の外反が顕著であり、頸部の2条貼付突帯、体部最大径部の3条貼付突帯に刻目が施される。外面には縦位ハケが施される。



第7図 土壙 SK27(15~19)、SK28(20)、SK32(24)、SK35(21~23)、SK38(25)、SK39(26) 出土遺物



第8圖 土壙 SK29出土遺物

⑧ 土壙 SK32 (第3、7図、図版4、15)

長辺70cm、短辺50cmの平面形が長方形を呈し、深さ10cmを測る土壙である。出土遺物には甕(24)がある。

甕24は内弯気味の体頸部に「L」字状口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線、体部外面には縦位の断続的なハケが施される。

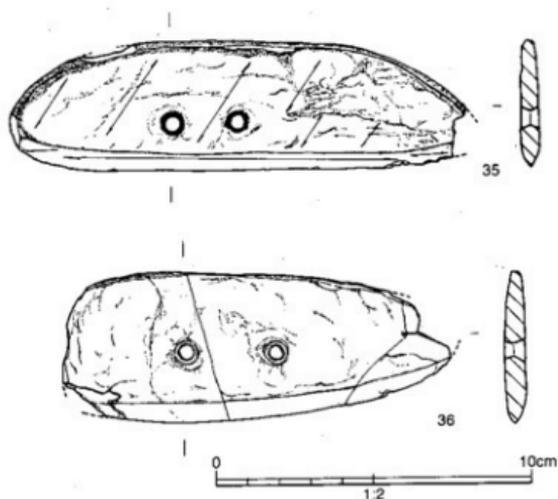
⑨ 土壙 SK36 (第3、7、9図、図版14)

長径1.3m、短径90cmの平面形が長円形を呈し、深さ35cmを測る土壙である。出土遺物には甕(21、22)、壺(23)、石包丁(36)がある。

甕21は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に5条沈線、体部外面に縦位ハケが施される。22は頸部が直立し「L」字状に近い口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に5条沈線、体部外面に縦位ハケが施される。

壺23は体部片であり、体部最大径付近の3条貼付突帯に刻目が施される。また、突帯間には円形刺突文により加飾される。

石包丁36は楕円形を呈する。残存刃部長11.0cm、最大幅4.7cm、厚み0.8cmを測る。刃部、端部、背部を部分的に欠損する。表面が磨滅しており、整形研磨については明確ではない。紐孔は2つ、体部やや刃部寄りに穿たれている。



第9図 土壙 SK23(35)、SK36(36)出土遺物

⑩ 土壙 SK38 (第3、7図、図版15)

長径1.4m、短径50cmの平面形が半円形を呈し、深さ40cmを測る土壙であり、調査地外へ広がる。出土遺物には壺(25)がある。

壺25は頸部に貼付による段を持つ。口縁部内面には横位ヘラミガキが施される。口縁部は段部より上位で外反する。

⑪ 土壙 SK39 (第3、7図、図版15)

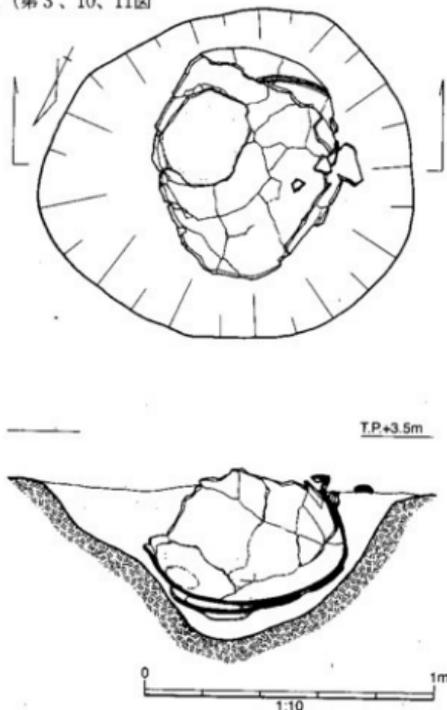
調査地内で遺構の一部の検出に留まり、形態・規模については明確ではない。出土遺物には壺(26)がある。

壺26は頸部に貼付による段を有し、口唇部は凹面を呈する。

(3) 土器棺墓

① 土器棺墓 SI01 (第3、10、11図

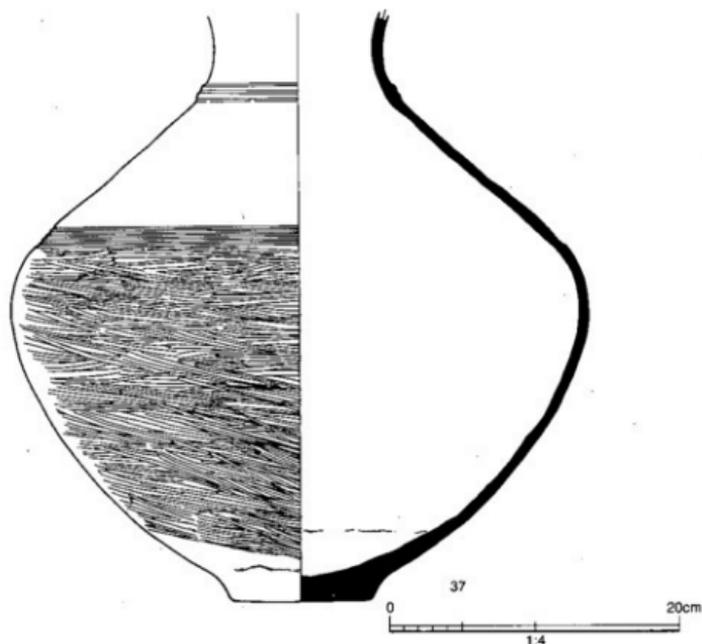
図版5、18)



第10図 土器棺墓 SI01

径60cmの平面形が不整形円形を呈し、断面形が深いレンズ状を呈し、深さ60cmを測る土壌に壺を埋置している。壺は体部の1/3以上および口頭部のほとんどを欠いた状態で、やや斜位に角度をもって置かれている。小乳幼児用の土器棺墓の可能性が考えられる。壺の埋置に伴い、事前に別の壺底部片を敷いている。棺の安定化を図っているのだろうか。壺内部には土が充満した状態であるが、出土遺物は見られない。また、棺を覆う蓋構造および埋葬方法についても不明である。

壺37は頸部から口縁部にかけて大きく外反するものと考えられる。また、器高において体部最大径はやや下がった位置にあり、体部が扁平化している。肩部に5条沈線、頸部には削出突帯を持ち、突帯上には沈線を併用するものである。内面は磨滅が著しいが、体部外面には横位ヘラミガキが見られる。



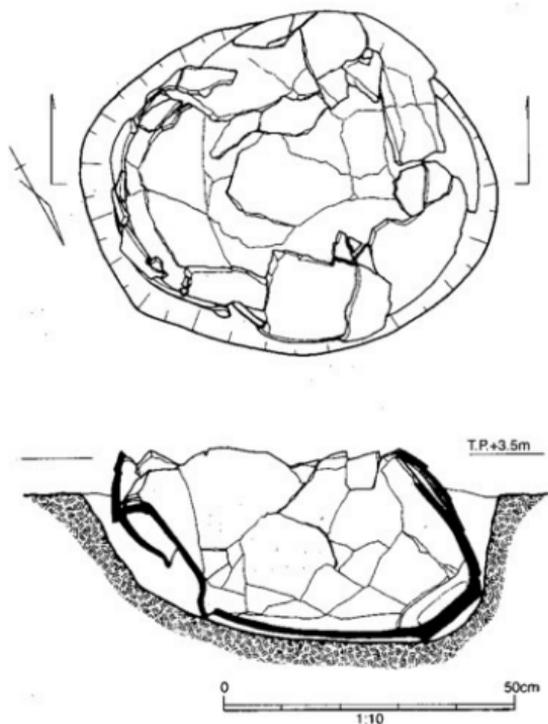
第11図 土器棺墓 SI01出土遺物

② 土器棺墓 SI02 (第3、12、13図、図版6、7、19、20)

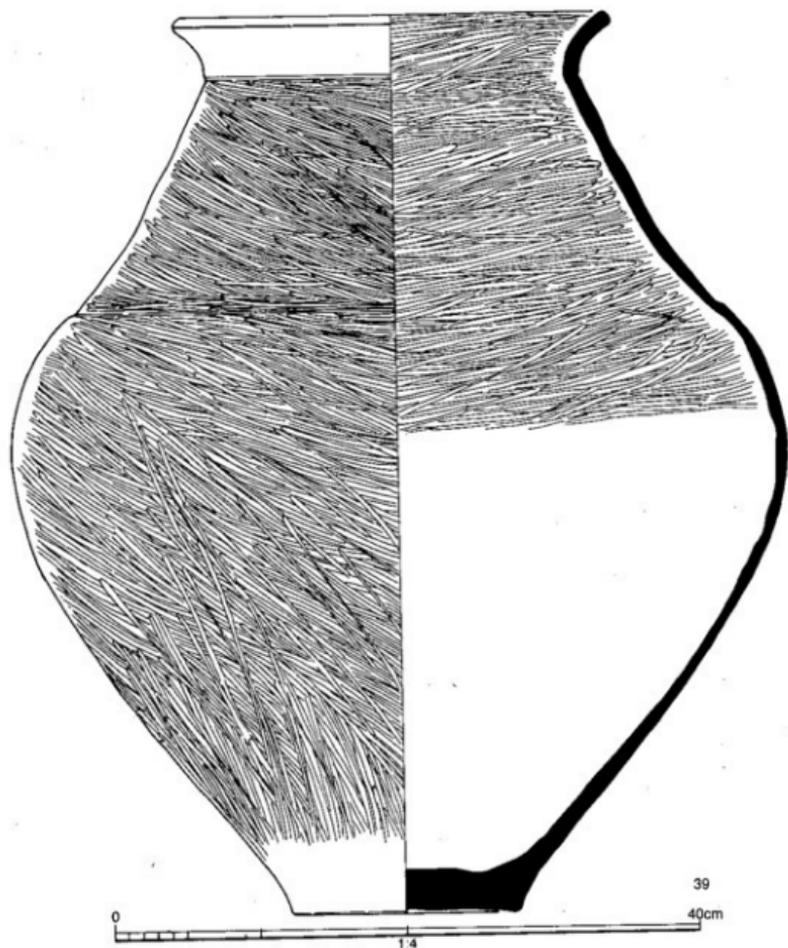
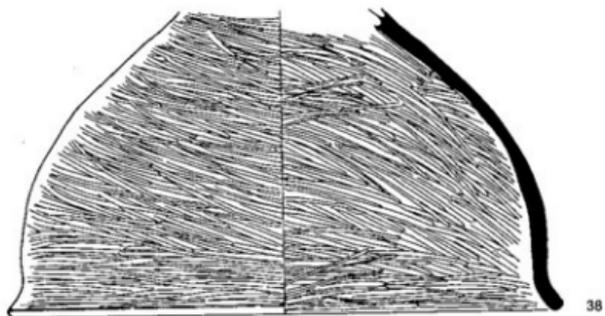
長径70cm、短径55cmの長円形を呈し、深さ30cmを測る土壌に、やや斜位を呈する土壌の底部に合わせて小乳幼児用の土器棺を埋置している。棺身には壺(39)、蓋には鉢(38)が転用されており、合わせ時に生ずる隙間には土が充填されたか、もしくは、あらかじめ壺の口頭部に土が巻かれていたかのいずれかが想定され、棺は完全に密封されている。棺内には土が充填されず、また遺物も見られないが骨片が出土している。

壺39は頭部および肩部に貼付けによる段を有する。最大径は体部上位に位置し、口縁部は段部から外反し、頸部は短く「ハ」の字状に開く。頸部～体部外面に斜位ヘラミガキ、口頭部～体部上位内面に横位ヘラミガキが施される。

鉢38は内弯しながら立ち上がる体部に短く外反する口縁部を持つ。底部は欠損するが、重機掘削時によるものであり、本来は完形品である。内外面ともに斜位ならびに横位ヘラミガキが施される。



第12図 土器棺墓 SI02

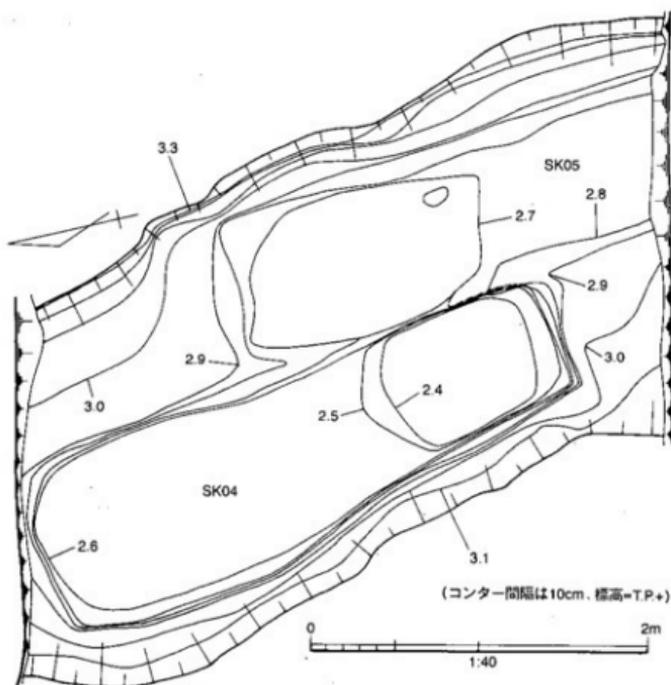


第13圖 土器棺墓 S102出土遺物

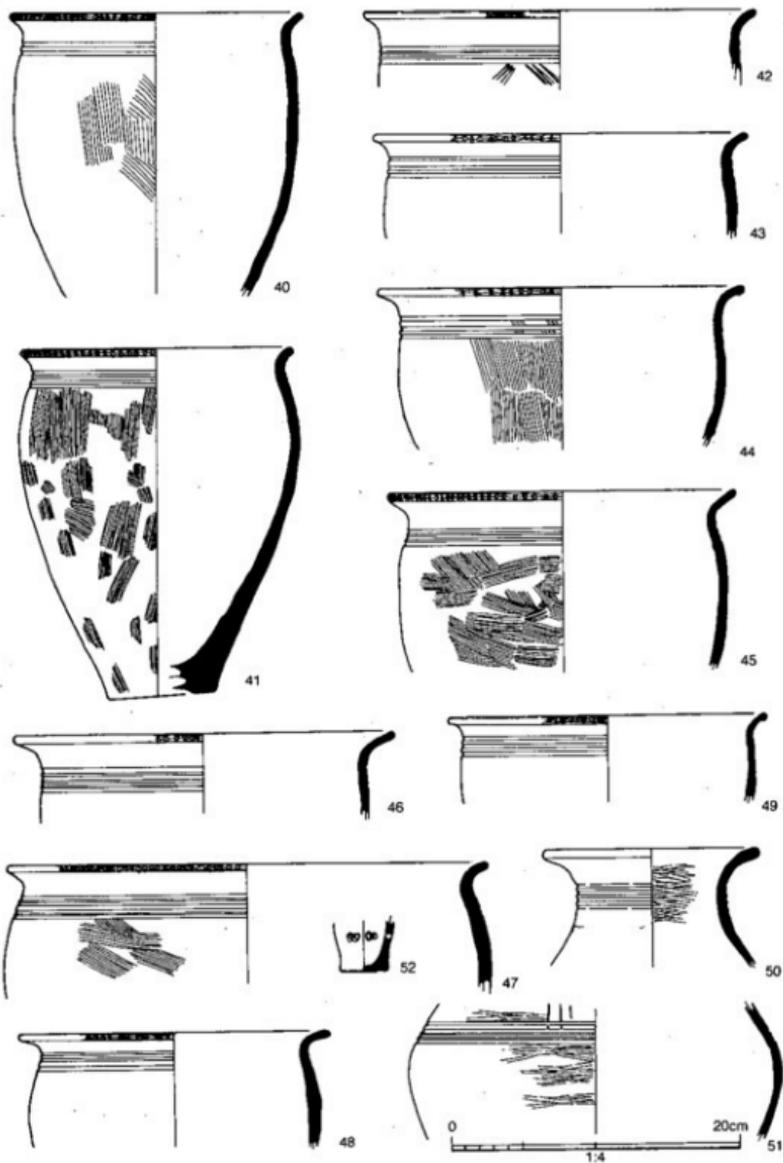
(4) 墓

① 土壙 SK04・05 (第3、14~17図、図版9、21~26)

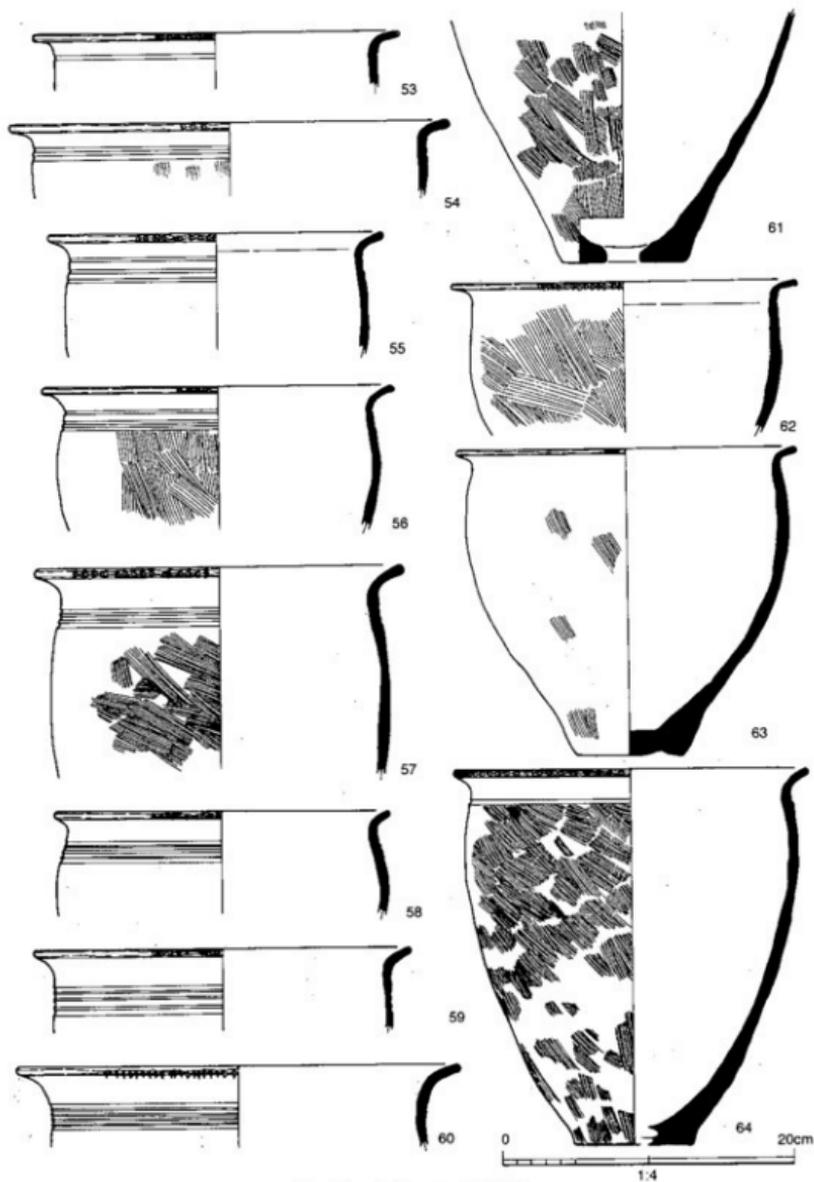
土壙 SK04は長辺3.5m、短辺1.0mの平面形が長方形を呈し、深さ60cmを測る土壙であるが、底部に長辺1.3m、短辺70cmの平面形が長方形を呈し、深さ20~40cmを測る底部が傾斜する土壙が付設される。また、土壙 SK05は長辺2.8m(+α)、短辺1.0mの平面形が長方形を呈し、深さ60cmを測土壙であり、調査地外へ広がる。底部には長辺1.5m、短辺80cmの平面形が長方形を呈し、深さ20cmを測る土壙が付設される。共に壁面がほぼ垂直であり、床面が平坦であること、また、小規模な土壙を底部に持つ特殊な形態を呈することから、埋葬構造については明確ではないが、何らかの施設を伴う墓であると考えられる。壁面における土層の観察から、SK04はSK05より古相と考えられる。また、SK05の埋土上位には黄色粘土質シルト(第3図-断面図29(3))=3層が堆積が見られ、最終的にはSK04とSK05は共通土(第3図-断面図28=灰黄褐色砂質シルト)により埋没する。SK04出土遺物には甕(40~49、53~64)、壺(50、51、67、68)、ミニチュア土器(52、66)、蓋(65)、SK05出土遺物には壺(69)、甕(70~74)がある。



第14図 土壙 SK04・SK05

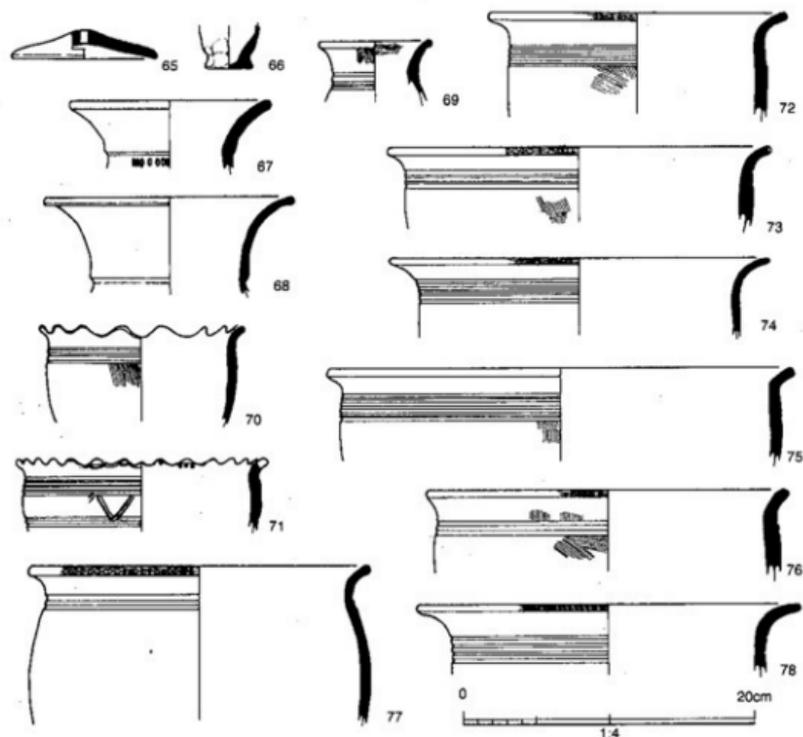


第15图 土壙 SK04出土遗物



第16図 土壇 SK04出土遺物

甕40は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に2条沈線が施される。41は体部に最大径を持ち、内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に3条沈線が施され、底部外周に輪状に粘土紐を輪状に貼付け平底成形を意識しているが、底部中央にわずかな凹部が見られる。42は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に3条沈線が施され、沈線下に山形状へら描文が施される。43は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施される。44は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線、体部外面に縦位ハケが施される。45は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線、体部外面に縦横位の断続的なハケが施される。46は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線が施される。47は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に4条沈線が施される。48は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施される。49は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施さ



第17図 土壺 SK04(65~68)、SK05(69~74)、SK20(75~78)出土遺物

れる。53は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に1条沈線が施される。54は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に2条沈線が施される。55~57は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施され、56、57の体部外面には縦位および斜位のハケが施される。58は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に4条沈線が施される。59は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に4条沈線が施される。60は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に5条沈線が施される。61は底部穿孔である。62は頸部が直立し如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目が施される。頸部は無文である。体部外面に縦斜位の断続的なハケが施される。63は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目が施されるが、頸部は無文である。底部外縁に輪状に粘土紐を貼付けている。64は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に1条沈線が施される。体部外面には斜位のハケが断続的に施される。

壺50は頸部削出突帯に3条沈線、51は肩部に4条沈線が施される。67、68は頸部に段を有するが、口縁部は長く大きく外反する。

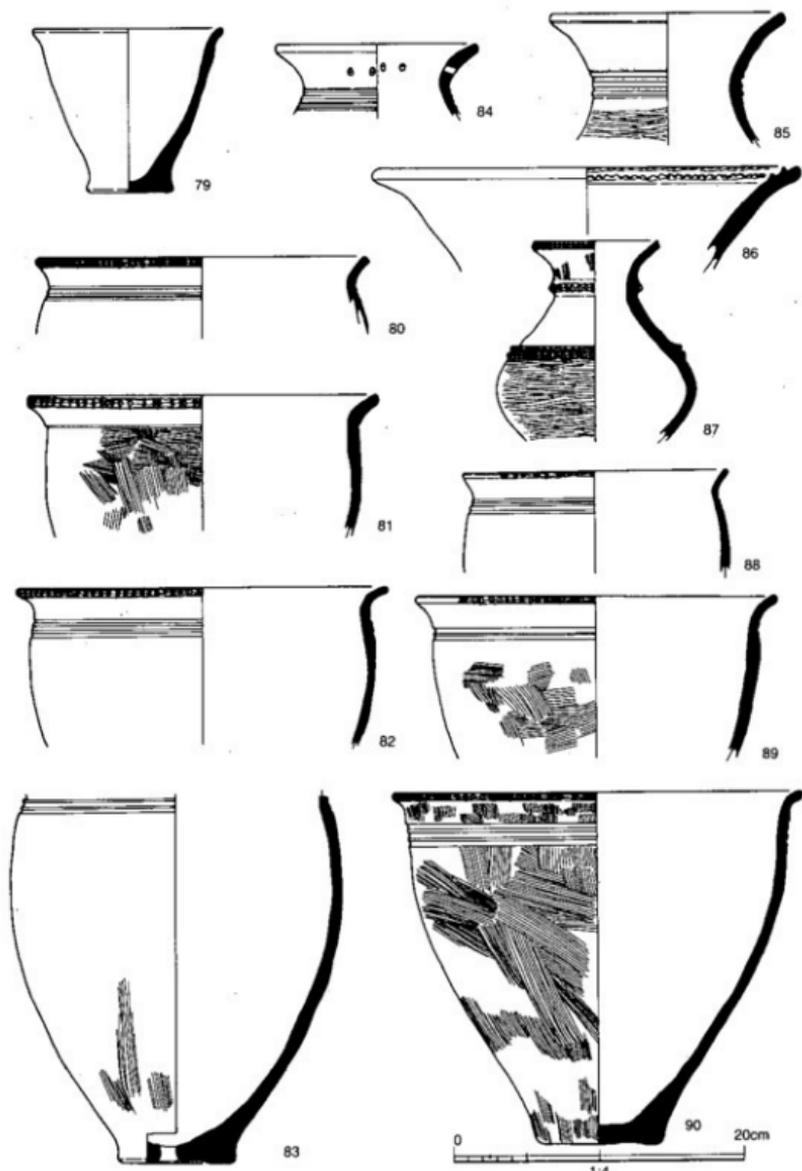
ミニチュア土器52は体部下位に穿孔を受ける。

## ② 土壙 SK10 (第3、18図、図版27)

調査地内において遺構の一部検出にとどまっている。幅50cm(+α)、長さ3.5m(+α)の収束する長楕円形の溝状を呈する。底部が収束部に対し、やや傾斜をもって上がり、舟底状を呈する。最深部で80cmを測る。埋土上位には、土壙SK04・05と同様(第3図一断面図29(3)=3層)が堆積している。また、中位には炭層が薄くレンズ状に堆積する。埋葬施設としての確定はなされないが特殊な形態を呈する土壙であり、土壙墓の可能性が考えられる。出土遺物には甕(79~83)、壺(84~86)がある。

甕79は体部が斜方向に直線的に立ち上がり如意形口縁を呈する。口唇部および頸部は無文である。80は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に3条沈線が施される。81は頸部が直立し如意形口縁を呈する。体部外面には縦横位の断続的なハケが施される。口唇部下端に刻目、頸部に1条沈線が施される。82は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線が施される。83は内弯気味の体頸部を呈し、口頸部を欠損する。意識的なものか否かについては不明である。頸部に3条(+α)沈線が施される。体部外面には縦位ハケが施される。底部に輪状の粘土紐を貼付けることにより、平底成形を意識しているが、底部中央が凹部を呈する。底部穿孔である。

壺84は頸部に幅広の削出突帯と3条沈線を併用している。口縁部には紐通しの2個1対の穴を穿孔している。85は頸部に幅広の削出突帯と2条沈線を併用している。体部外面には横位のヘラ



第18図 土壙 SK10(79~86)、SK40(87~90) 出土遺物

ミガキが施される。86は口縁部内面には2条の貼付突帯に刻目が施される。

### ③ 土壙 SK40 (第3、18図、図版28)

長辺1.8m、短辺1.0mの平面形が不整長方形を呈し、深さ40cmを測る。北側短辺部に幅20cm、長さ65cmの小穴が見られる。木口部に該当するものであろうか。埋土中位には炭層がレンズ状に薄く堆積する。埋葬構造を示す構造物は見られないが、木棺墓であると考えられる。出土遺物には壺(87)、甕(88~90)がある。

壺87は口唇部に粘土組貼付時の接合痕が見られる。口唇部に刻目、頸部に1条貼付突帯、肩部に2条貼付突帯を持ち、それぞれに刻目が施される。肩部以下の体部外面は横位ヘラミガキが施される。

甕88は内弯気味の体頸部に如意形口縁を呈する。口唇部下端に刻目、頸部に2条沈線が施される。89、90は頸部が直立し如意形口縁を呈する。89は口唇部全面に刻目、頸部に2条沈線、体部外面には不定方向に断続的なハケが施され、90は口唇部全面に刻目、頸部に3条沈線、体部外面には縦斜位に断続的なハケが施される。

## 4 小 結

調査では多数の遺構、遺物を検出しているが、住居跡を含めた生活諸遺構の確認はなされていないことから、調査地は基本生活領域から外れた地域に該当するものと考えられる。

土壙SK04、05、10、40および土器棺墓S101、02は形態は異なるものの、いずれも埋葬施設、あるいはその可能性をもつ遺構として認識されるものであり、集落における墓域空間として理解されるものである。近接する徳島大学医学部構内の調査においても、石棺墓や配石墓、土壙墓で構成される墓域の検出例<sup>2)</sup>があることから、当地へ墓域が広がるものとして理解される。ただこれらの埋葬施設が、ある程度の規模を示す基本生活領域の周縁部に広がるものなのか、もしくは小単位の住居跡群に対応する墓域であるのか、今後詳細な検討が必要である。

また、土壙墓に想定される土壙SK04、05は底部に床面全体の1/2~1/3を占める長方形の土壙を掘り込んだ特殊な構造を呈す。さらに床面掘込土壙からは遺物が集中して出土している。石棺墓や配石墓の検出事例を含めたこの地域の特殊な埋葬形態は、南蔵本遺跡周辺で展開した弥生時代前期の限定的な集落遺跡においてのみ理解されるべきものである。

出土遺物は壺には頸部に段を有するもの、頸部および肩部に数条の沈線が施されるもの、削出突帯および貼付突帯が施されるものが見られる。また、甕においても、如意形口縁や「L」字状口縁、頸部沈線が1~十数条に至るものまでが見られる。頸部沈線の施文に関しては、4条沈線までは輪状に施され、結束部には不整合の箇所が見られる。また、5条以上については、螺旋状に巡らし、櫛指によるものではない。確かに、各器種における、個々の諸属性においては古い様

相を示すものも見られるが、総体的には前期新段階に位置付けられるものである。

ただ土器棺墓 S101において、棺身に転用されている壺39は頸部および肩部に段を有し、頸部が短く「ハ」の字状に開く形態を示し、庄・蔵本～南蔵本遺跡における遺物状況からは異質である。庄・蔵本～南蔵本遺跡の集落より前出とされる三谷遺跡においても確認されない古いタイプの壺である。これが直ちに、南蔵本周辺における弥生時代古段階からの集落痕跡の可能性を示すものとは考え難く、土器棺墓 S101の壺37の削出突帯+肩部5条沈線の状況やその他の遺構出土遺物の状況から、新しい様相の中で共伴するタイプと考えられる。大壺の型式変化は鈍る可能性も考慮しなければならない。

このように旧鮎喰川水系の遺跡群の中で、本格的な弥生集落を先駆的に成熟させた南蔵本周辺地域は、徳島における弥生文化の生成を考える上で貴重な遺跡である。

#### 註

- (1) 徳島大学埋蔵文化財調査室編『庄・蔵本遺跡』1－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査一、1998年
- (2) 徳島市教育委員会『阿波を掘る』第14回埋蔵文化財資料展図録、1994年
- (3) (1)に同じ



# 名東遺跡 (住宅開発工事)

## 1 調査に至る経緯と経過 (第1、2図)

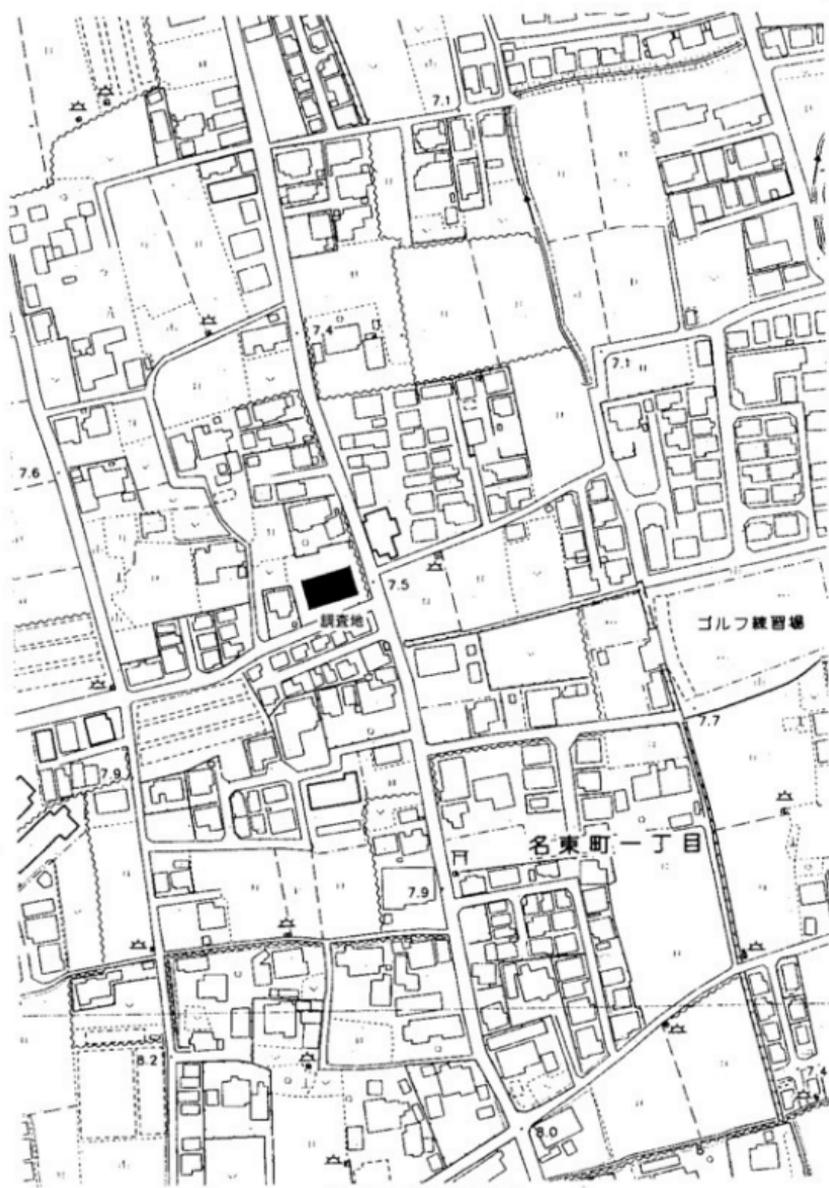
名東遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した標高T.P.+8m前後を測る沖積微高地上に位置する縄文時代晩期～中・近世に至る集落遺跡である。そして、名東遺跡における集落遺跡としての様相には大きく弥生集落と中世集落の二つの側面がある。

名東遺跡における弥生時代の集落経営は主に中期末に集中的に行われ、しかも存続期間は短い。その後、集落経営は後期末・庄内式併行期に至るまで痕跡が見られず、しかもこの時期に突然活発化する。この二つの時代の集落構造についてはまだまだ不明であり十分に論ずるには及ばない。しかも、遺跡の評価を最大限に高める要素としての「銅鐸の埋納」や「朱の精製具」などの特殊事例の発見は、集落の適正な評価が得られていない現状において、集落論を総括する資料として十分な役割を果たしきれていない。また、名東遺跡を代表するもう一つの側面である中世集落に関しては、弥生集落にも増して、調査事例の過少から生ずる性格把握についての不明瞭さは深刻である。

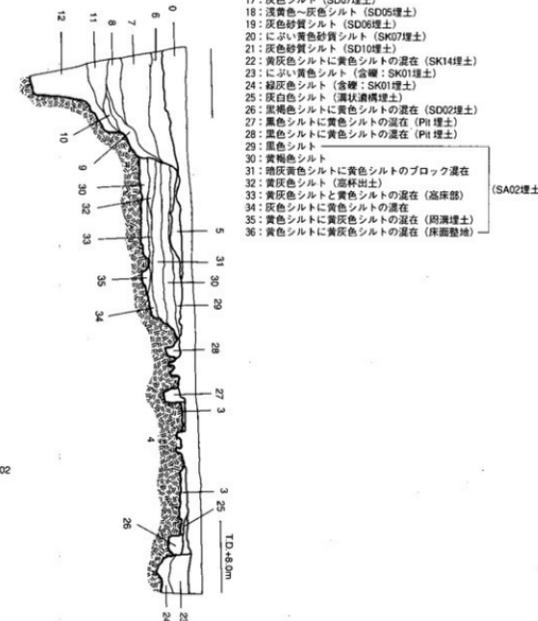
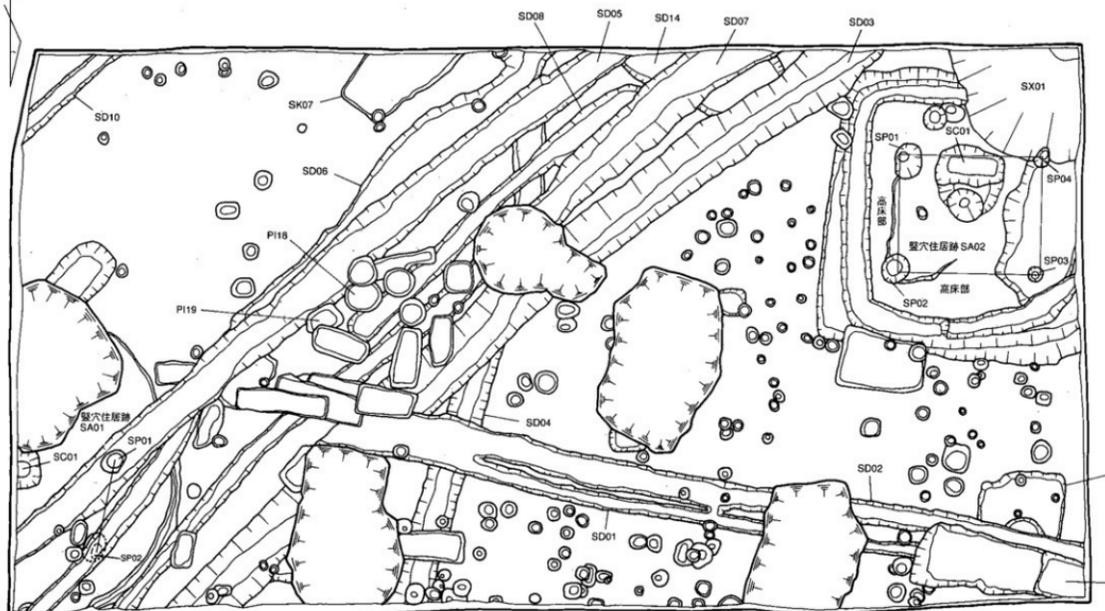
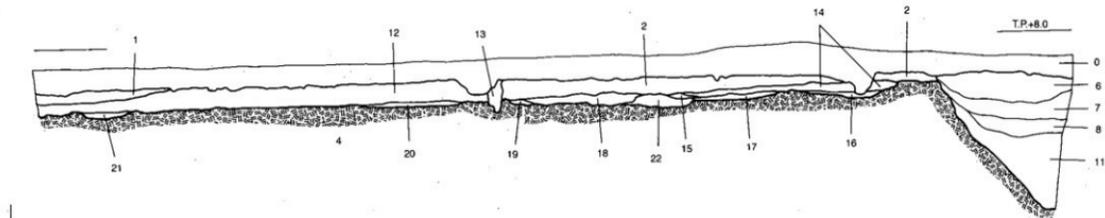
今回の調査は住宅開発工事に伴うものである。これまでに周辺地域での発掘調査の実施があり、当該地においても、弥生時代ならびに中世集落の一面に位置する可能性が高いことが想定された。試掘調査において遺構・遺物の存在を確認すると共に、建物建設部において調査を実施した。調査地は荒蕪地であるが、以前は宅地として利用されており、比較的規模の大きな攪乱が部分的に見られるものの、遺跡としての残存状況は良好である。



第1図 調査地位置図



第2図 調査地概略図



- 0: 現代盛土
- 1: 灰黄色砂質シルト (含礫: 旧耕作土)
- 2: にぶい黄色シルト (含礫: 旧耕作土)
- 3: にぶい黄色シルトと黒色シルトの混在 (埋耕層)
- 4: 黄色シルト～砂質シルト
- 5: 浅黄色シルト (溝状遺構)
- 6: 黄色シルトと黒色シルトの混在
- 7: にぶい黄色シルトに黒色シルトが混在
- 8: 黄褐色砂質シルトに黒色シルトが混在
- 9: 緑灰色シルトと黒色シルトと黄色シルトの混在 (SK01埋土)
- 10: 明黄褐色砂質シルト
- 11: 浅黄色砂質シルトに灰色粘土質シルトが混在
- 12: 浅黄色粘土に灰色シルトの混在
- 13: 黄褐色砂質シルトに黄色シルトの混在
- 14: 浅黄色シルト (含礫: SD03.07.08共通埋土)
- 15: 灰色シルト (SD08埋土)
- 16: 灰色シルト (SD03埋土)
- 17: 灰色シルト (SD07埋土)
- 18: 浅黄色～灰色シルト (SD05埋土)
- 19: 灰色砂質シルト (SD06埋土)
- 20: にぶい黄褐色砂質シルト (SK07埋土)
- 21: 灰色砂質シルト (SD10埋土)
- 22: 黄灰色シルトに黄色シルトの混在 (SK14埋土)
- 23: にぶい黄色シルト (含礫: SK01埋土)
- 24: 緑灰色シルト (含礫: SK01埋土)
- 25: 灰白色シルト (溝状遺構埋土)
- 26: 黄褐色シルトに黄色シルトの混在 (SD02埋土)
- 27: 黒色シルトに黄色シルトの混在 (P11埋土)
- 28: 黒色シルトに黄色シルトの混在 (P11埋土)
- 29: 黒色シルト
- 30: 黄褐色シルト
- 31: 暗灰色シルトに黄色シルトのブロック混在
- 32: 黄灰色シルト (旧耕出土)
- 33: 黄灰色シルトと黄色シルトの混在 (高床部)
- 34: 灰色シルトに黄色シルトの混在
- 35: 黄色シルトに黄灰色シルトの混在 (附溝埋土)
- 36: 黄色シルトに黄灰色シルトの混在 (床面埋土)

第3図 遺構配置図・断面図

## 2 基本層序 (第3図)

調査地周辺の現地表面は標高T.P.+7.5mを測り、現代盛土層(0層)下に1~4層が堆積する。以下、上位より概略する。

- 1: 層厚25cmを測る灰黄色砂質シルトであり、調査地東端部に堆積が認められる(旧耕作土)。
- 2: 層厚20~40cmを測るにぶい黄色シルトであり、調査地を北東~南西で二分した場合に南東部において堆積が見られる(旧耕作土)。
- 3: 層厚5~10cmを測るにぶい黄色シルトと黒色シルトの攪拌層であり、本来、2層より下位に堆積していたと考えられる黒色シルト層(弥生時代包含層)を攪拌したものであり、3層も削平されている。調査地の北西部において堆積が見られる。
- 4: 黄色シルト~砂質シルトであり、遺構検出ベース層である。

## 3 検出遺構と出土遺物 (第3図、図版1)

基本層序において概略した黄色シルト~砂質シルト(4層)上面において、竪穴住居跡、土壌、溝、ピットを検出している。以下、主な遺構、遺物について概略する。

### (1) 弥生時代

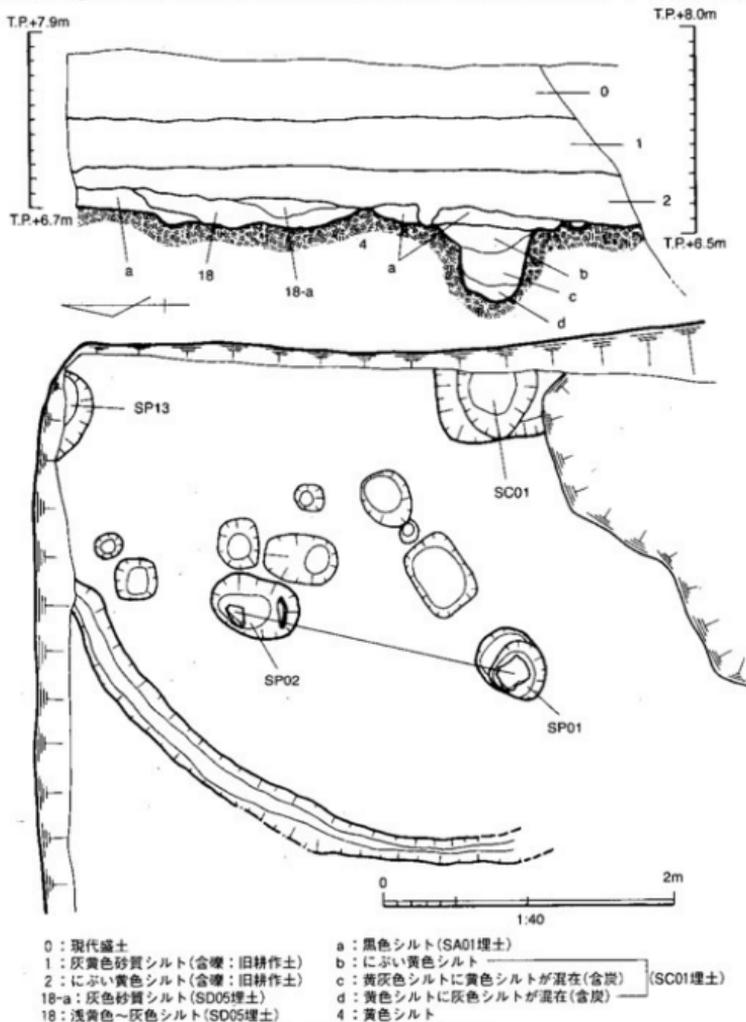
#### ① 竪穴住居跡 SA01 (第3~6図、図版2~5、12、13、15)

調査地北東隅部において全体の1/3を検出し、一部攪乱により破壊されている。平面形が推定6.5mの円形を呈するが、溝SD05~07による破壊および2層の堆積状況から床面直上まで後世の削平を受けており、住居跡埋土の黒色シルト(a層)が部分的に見られる。また幅25cm、深さ5cmを測る壁溝が部分的に残存する。主柱穴は2ヶ所確認しており、SP01は平面形が径40cmの不整形円形を呈し、深さ30cmを測る。またSP02は長径60cm、短径40cmの平面形が長円形を呈し、深さ30cmを測る。いずれも柱穴底部に結晶片岩を板状に加工した根石を持つ。また住居中央部に短径40cm、推定長形80cmの平面形が長円形を呈する土壌が存在する。埋土に炭および焼成痕跡が見られること、さらに住居内での位置から炉跡(SC01)と考えられる。

出土遺物には床面直上に遺棄された状態で、甕(1~4、12)、鉢(7、8)、短頸壺(9)、高坏(11)、把手付短頸壺(10+13)、打製石包丁(14、15)、炉跡SC01より甕(5)、SP13より甕(6)が出土している。

甕1は口縁部を「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方に拡張し、端面に幅狭の2条凹線が通

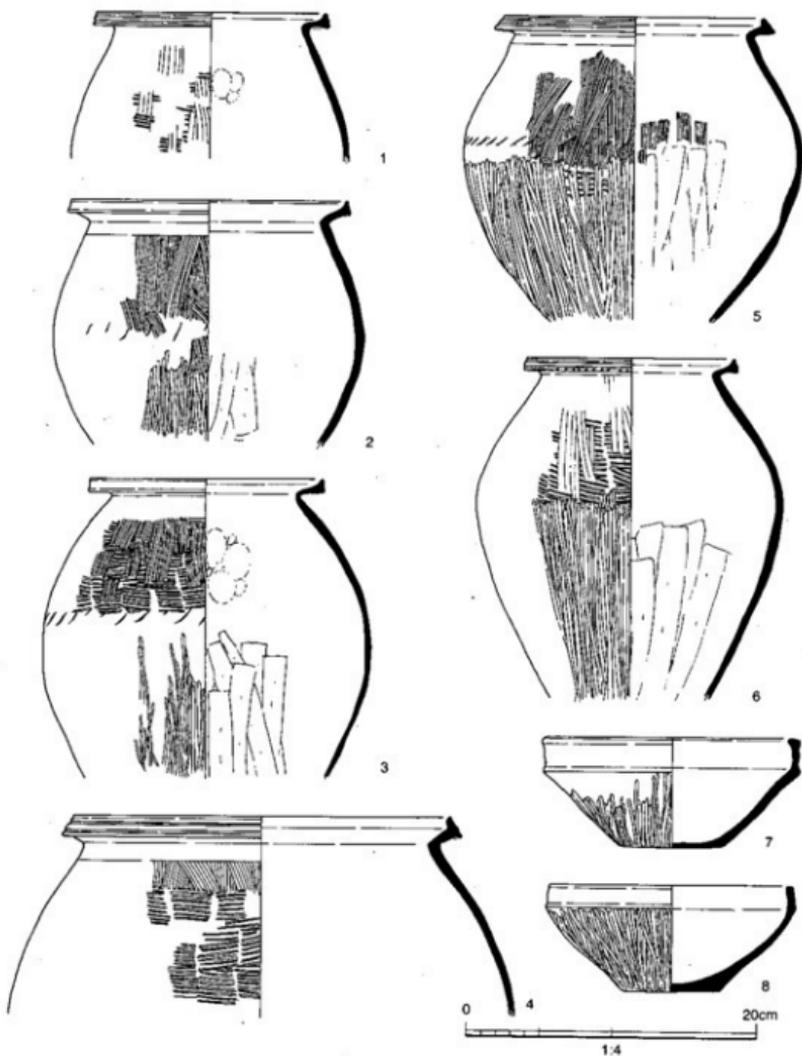
る。体部外面には横位タタキ後、縦位ハケが施される。2は口縁端部を上下に拡張し、端面は凹面を呈する。体部外面上位1/3には縦位ハケ、下位2/3には縦位ヘラミガキが施される。また、体部最大径に刺突文が巡る。体部内面下位2/3には縦位ヘラケズリが施される。3は口縁端部を上方に拡張し端面は凹面を呈する。体部上位1/3には横位タタキ後、縦位ハケ、下位2/3には縦位ヘラミガキが施され、体部最大径に刺突文が巡る。体部内面下位2/3には縦位ヘラケズリ、上位1/3



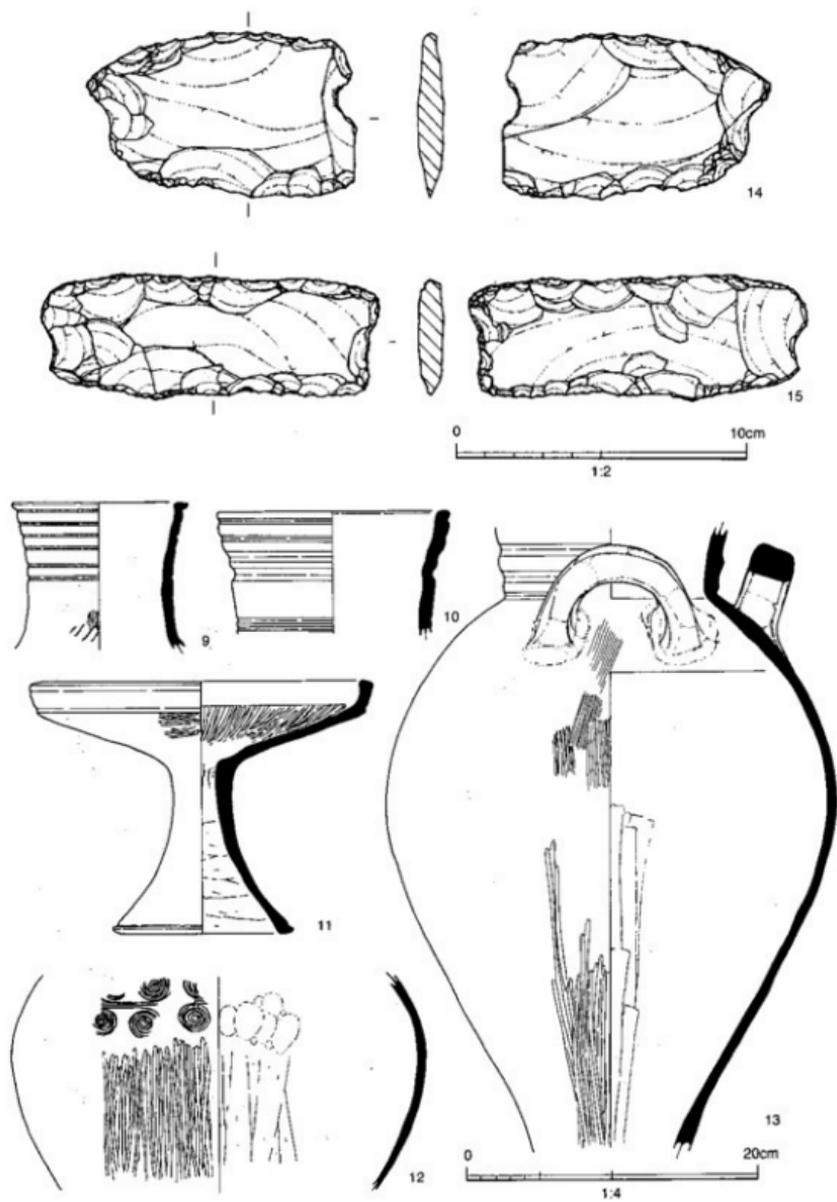
第4図 竪穴住居跡 SA01

にはユビオサエが見られる。

4は口縁端部の上下への拡張が顕著であり、端面に幅狭の3条凹線が巡る。体部外面上位に横位タタキ後、縦位ハケが施される。5は口縁部を上方に拡張し、端面に幅狭の2条凹線が巡る。



第5図 竪穴住居跡 SA01(1~4、7、8)、炉跡 SC01(5)、SP13(6)出土遺物



第6图 竖穴住居跡 SA01出土遺物

体外面には横位タタキ後、上位1/3には縦位ハケ、下位2/3には縦位ヘラミガキ、体部内面上位1/3には縦位ハケ、下位2/3には縦位ヘラケズリが施される。体部最大径に刺突文が巡る。6は口縁端部を上方に拡張し、端面に幅状の2条凹線が巡る。口縁部下端に刻目が施される。体部外面には横位タタキ後、上位1/3には縦位ハケ、下位2/3には縦位ヘラミガキ、体部内面下位2/3には縦位ヘラケズリが施される。

鉢7は体部から直立する口縁部を持ち、口縁部直下および体部屈曲付近に鈍い凹線が巡る。口縁部内外面を肥厚させ、端面は平坦である。体部外面に縦位ヘラミガキが施される。8は体部からやや内傾直立する口縁部を持ち、口縁部直下および体部屈曲付近に鈍い凹線が巡る。体部外面に縦位ヘラミガキが施される。

短頸壺9は頸部中位から緩やかに外反する口頸部を持ち、口縁端部を外側への拡張が顕著である。頸部外反部に6条凹線が巡り、頸部下位には刺突文が施される。

把手付短頸壺10+13は同一個体である。口頸部は外反気味に立ち上がり凹線を多用する。体部外面上位1/3には縦位ハケ、下位2/3には縦位ヘラミガキ、体部内面下位2/3には縦位ヘラケズリが施される。

高坏11は皿形の坏部を呈し体部から短く外傾する口縁部を持つ。口縁部直下および体部屈曲付近に鈍い凹線が巡る。脚端部に1条凹線が巡る。坏部外面に横位ヘラミガキ、坏部内面に縦位ヘラミガキが施される。円盤充填であるが剥落している。

12は甕体部片であるが体部外面に渦巻文が見られる。

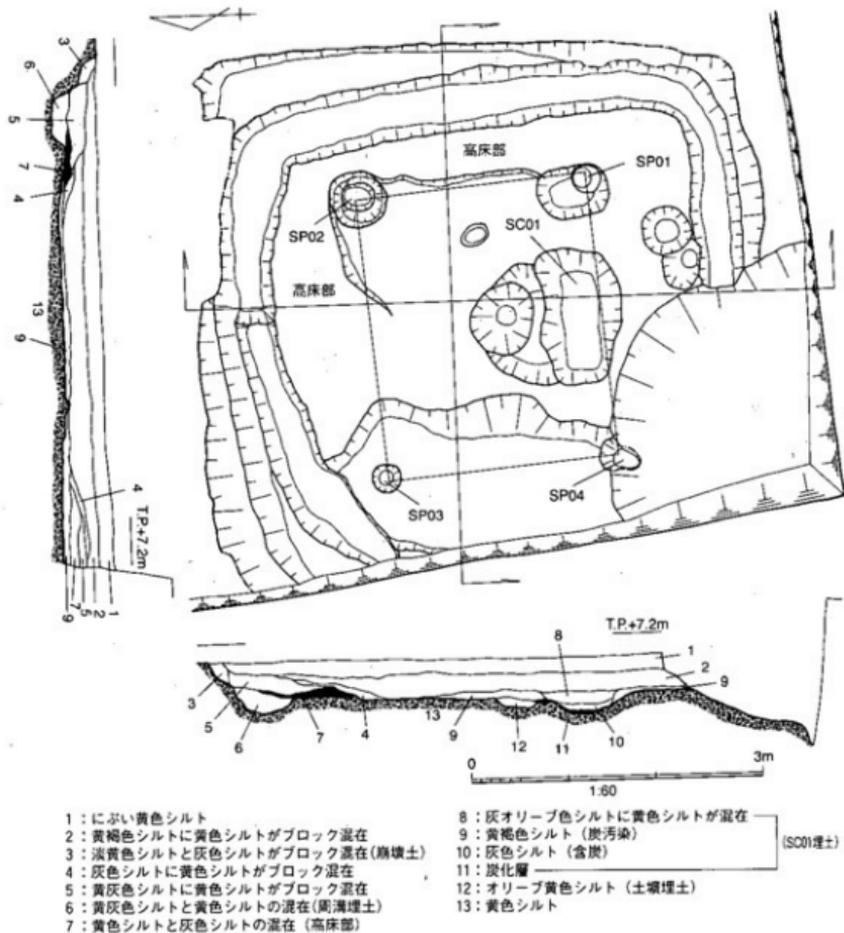
打裂石包丁14は横形剥片を素材とする。刃部長8.1cm、最大幅9.0cm、厚さ1.0cmを測る。刃部は薄形深形直線形両面細部調整により作り出される。背部は薄形浅形凸形両面細部調整によるが、原面が残存する。背部にはステップフレーキングが顕著である。右縁には薄形深形凹形両面細部調整、左縁には薄形深形表面細部調整後に薄形深形両面細部調整による極凹形のノッチを入れ、ノッチの両側をたたき折りにより整形する。15は横形剥片を素材とする。刃部長10.8cm、最大幅11.5cm、厚さ1.0cmを測る。刃部は薄形深形直線形両面細部調整、背部は非極厚形直線形両面細部調整により作り出される。背部にはステップフレーキングが顕著である。右縁には薄形浅形凹形両面細部調整、左縁は薄形深形両面細部調整後に薄形浅形両面細部調整により極凹形のノッチを入れ、両側をたたき折る。ともに材質はサヌカイト製である。

## ② 竪穴住居跡 SA02 (第3、7～9、図版6、7、14、15)

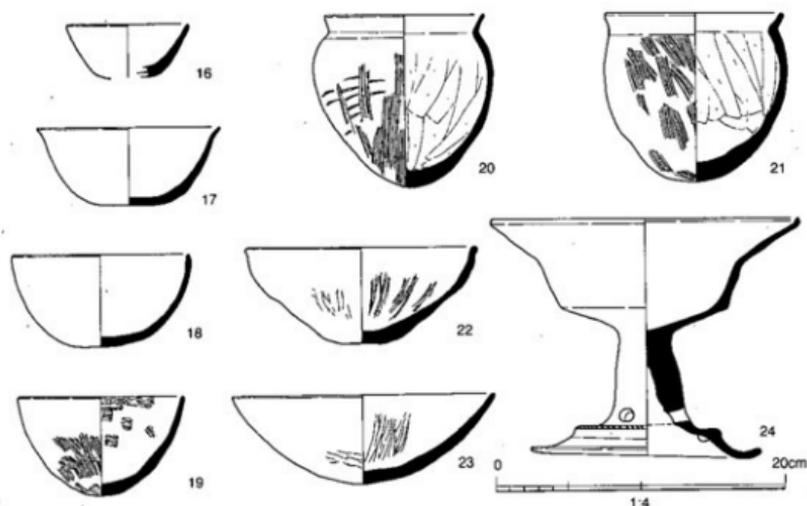
南東隅部が後世の擾乱を受け、住居の西側部が調査地外へ広がる。一辺6mを測る平面形が隅丸方形を呈し、壁高40cmを測る。幅40～60cm、深さ15～20cmの断面形が深い皿状もしくは逆台形を呈する壁溝が巡る。また、床面北側～東側にL字状に、幅40～70cm、高さ5cmを測る床面削り出しによる段状部が見られる(高床部)。壁溝埋没後、同じ位置に盛土による高床部が作られる。

主柱穴は4ヶ所で確認している。SP01～SP04は径30cmの平面形が円形を呈し、深さ40～50cmを測る。住居中央部よりやや東側に長辺1.4m、短辺80cmの平面形が不整長方形を呈し、深さ20cmを測る土壌が見られ、底部に炭層の堆積さらに周辺部に炭による床面汚染が見られることから炉跡（SC01）と考えられる。出土遺物には鉢（16～23）、高坏（24）、鉄鍬（25）がある。

鉢16～19はボール状を呈するが、17は口縁端部を外反させる。22、23は皿状を呈し、23は丸底化が顕著である。20、21は短く外反する口縁部を持つ。20の体部外面にはタタキ後に縦位ハケ、体部内面には縦位ヘラケズリが施される。21は体部外面には縦位ハケ、体部内面には縦位ヘラケ



第7図 竪穴住居跡 SA02



第8図 竪穴住居跡 SA02出土遺物

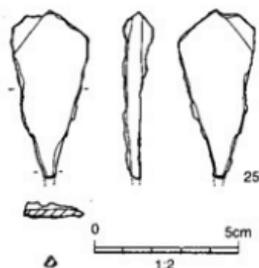
ズリが施される。高坏24は坏部の体部から口縁部へ大きく外反し、口縁端部を上位に摘み上げる。脚柱部は「ハ」の字状に緩やかに開き、脚端部はさらに「て」の字状に大きく開く。脚柱部下に円形透かしを3個穿つ。

③ 土壙 SK02 (第3、10、11、図版8～10、16、17)

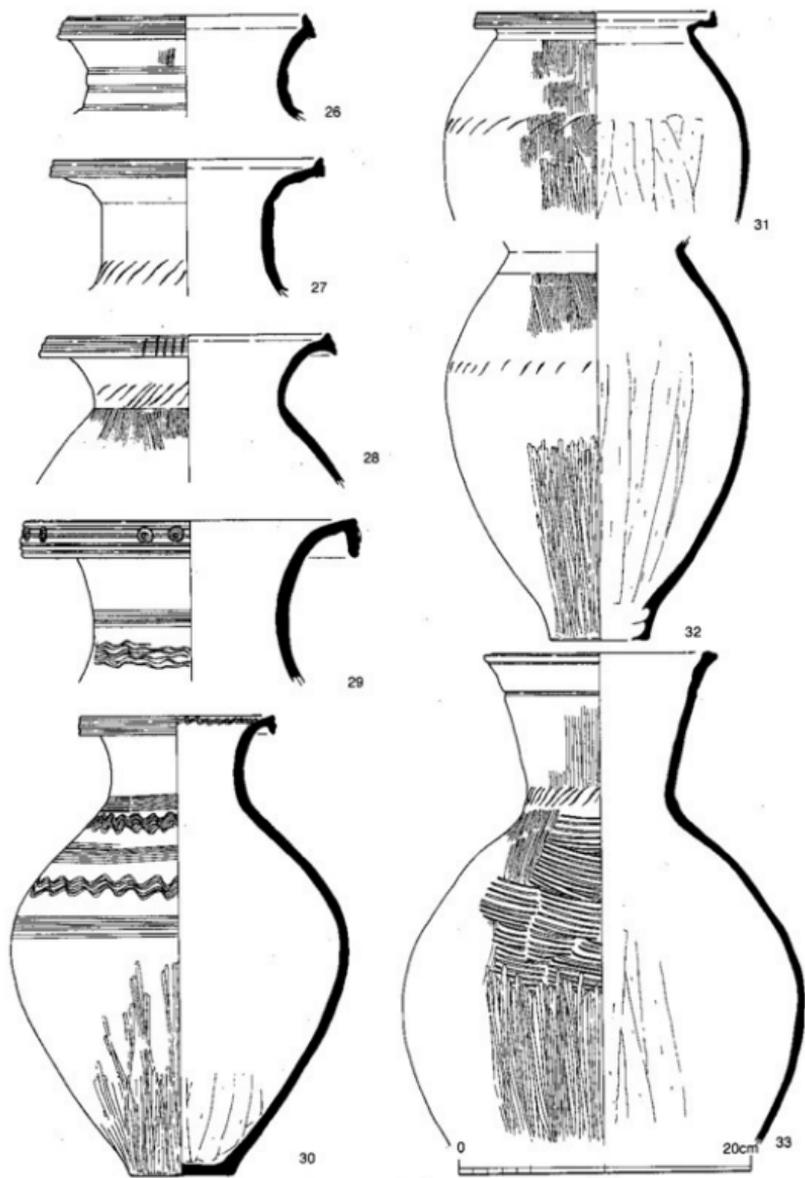
溝 SD02により遺構上位が攪乱されているが、長辺2.0m、短辺1.3mの平面形が不整隅丸長方形、断面形は深さ10cm

を割る浅いレンズ状を呈し、削平の可能性が強い。出土状況から廃棄土壙であると考えられるが、土壙底部には鉄屑片が散乱している。出土遺物には広口壺 (26～30)、短頸壺 (33)、甕 (31、32、38)、高坏 (34～37)、鉢 (39)、鉄屑がある。

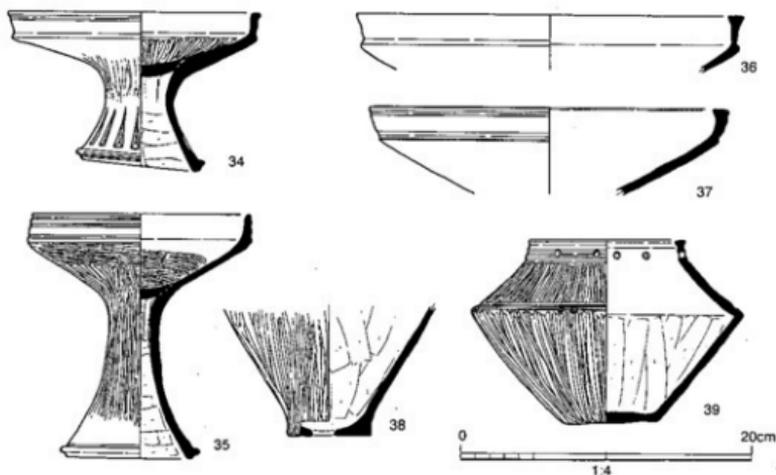
広口壺26は短くやや内傾する頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち、端部を上下に拡張する。口縁部端面には3条凹線、頸部には幅狭の3条凹線が巡る。27は直立する頸部から大きく外反する口縁部を持ち、口縁端部の上方への拡張が顕著である。口縁部端面には2条凹線、頸部下位には貝殻状刺突文が巡る。28は体部境界から大きく外反する口頸部を持ち、口縁部端面を上下に拡張し、口縁部端面には2条凹線が巡る。口縁部端面および口頸部下位に刺突文が巡る。29は体部境界から頸部が外反しながら立ち上がり、さらに短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は下方に垂下し、口縁端面に4条凹線+2個1対の円形竹管浮文、頸部は櫛指直線文+波状文により



第9図 竪穴住居跡 SA02出土鉄遺物



第10図 土壙 SK02出土遺物



第11図 土壙 SK02出土遺物

加飾される。30は体部境界から外反しながら立ち上がる頸部から短く外反する口縁部を持ち、口縁部端面には2条凹線が巡り、口縁部内面には櫛描波状文が施される。また体部上半には櫛描直線文3単位+波状文2単位の組み合わせにより装飾される。体部下半には縦位ヘラミガキ、体部内面下位に縦位ヘラケズリが施される。

短頸壺33は斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部を持ち、口縁部内外面をわずかに肥厚させさせ、端面は凹面を呈する。口縁部やや下がった位置に幅狭の1条凹線が巡る。体部と頸部の境界付近に貝殻状刺突文を施す。頸部外面に縦位ハケ、体部外面上半に右下がりのタキ後、縦位ハケ、体部下半には縦位ヘラミガキ、体部内面下半には縦位ヘラケズリが施される。

壺31は「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、端部を上方に拡張し、端面には2条凹線が巡る。体部最大径付近に刺突文を施す。体部外面上位1/3に縦位ハケ、体部外面2/3に縦位ヘラミガキ、体部内面2/3に縦位ヘラミガキが施される。32は頸部以上を欠損する。体部最大径付近に刺突文を巡らし、体部外面上位に縦位ハケ、体部下位に縦位ヘラミガキ、体部内面2/3に縦位ヘラミガキが施される。38は底部片であるが、底部穿孔である。

高坏34は皿形の坏部であり、体部から直立する口縁部を持ち、口縁部直下および体部屈曲部に鋭い凹線が巡る。脚柱部は「ハ」の字状に開き、脚端部外面は肥厚し、端面は凹面を呈する。脚柱部には三角形の透しが施されるが、いずれも貫通していない。坏部～脚柱部外面に縦位ヘラミガキ、坏部内面には縦位ヘラミガキ、脚柱部内面には横位ヘラケズリが施される。接合は円盤充填である。35は深みのある皿形の坏部であり、体部から直立する口縁部を持ち、口縁部に幅狭の3状凹線が巡る。脚端部外面は肥厚し、端部および端面に凹線が巡る。坏部外面には横位ヘラミ

ガキ後、縦位ヘラミガキ、脚柱部には縦位ヘラミガキ、坏部内面には横位ヘラミガキ、脚柱部内面には横位ヘラミガキが施される。接合は円盤充填である。36、37は皿形の坏部であり、体部から直立する口縁部を持ち、口縁端部を内外面肥厚させ、端面には2条凹線が巡る。36は体部屈曲部、37は口縁端部直下および体部屈曲部に鈍い凹線が巡る。

鉢39は算盤玉形の体部を呈し、体部屈曲は明瞭である。口縁端部を内外面肥厚させ、口縁端部直下に2個1対の孔を2箇所に穿つ。体部屈曲部に2条凹線と2個1対の円形竹管浮文で加飾され、体部外面は縦位ヘラミガキ、体部内面下半は縦位ヘラケズリが施される。

## 2 中世

### ① 溝SD04(第3、12図、図版11、18)

幅80cm、深さ25cm、断面形が逆台形を呈する南北方向の溝であり、溝SD03、05～08、10とは方向を異にする。出土遺物には瓦器碗(40)がある。

瓦器碗40は畿内産であり、体部外面にエビオサエ後、部分的にヘラミガキが施される。体部内面には圏線状ヘラミガキ、内面見込みには平行線暗文が施される。

### ② 溝SD05(第3、12図、図版11、18)

幅70～80cm、深さ15cm、断面形が浅い皿状を呈する北東～南西方向の溝であり、溝SD03、06～08、10と同方向である。出土遺物には白磁碗Ⅳ類(44)がある。

### ③ 溝SD06(第3、12図、図版11、18)

幅50cm、深さ20cm、断面形が浅い皿状を呈する北東～南西方向の溝であり、溝SD05により切られている。出土遺物には瓦器小皿(41)、瓦質甕(42)がある。

瓦器小皿41は口径9cm、器高1.3cmを測る畿内産である。

甕42は口縁端部内面に凹部が見られ、端面は平坦である。

### ④ 溝SD07(第3、12図、図版11、18)

幅50～90cm、深さ10～15cm、断面形が浅い皿状を呈する北東～南西方向の溝である。溝SD03と並走する溝であり、最終埋土が共通することから、共存あるいは埋没時に1条の溝として機能していた可能性がある。出土遺物には白磁碗Ⅳ類(43)がある。

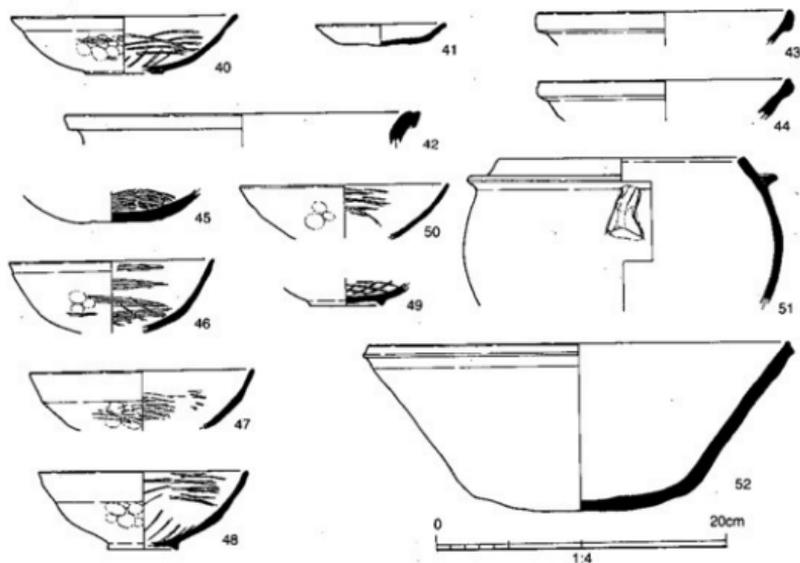
### ⑤ 土壌SK14(第3、12図、図版11、18)

溝SD03、05、07により切られ、調査地外へ広がるため、全形については明確ではないが、推定長辺1.2m、短辺80cmの平面形が長方形を呈し、深さ10cmを測る土壌である。出土遺物には黒

色土器碗(45)、瓦器碗(46~49)が出土している。

黒色土器碗45は高台が剥落しているが、B類碗である。底部内面には分割によるヘラミガキが見られる。

瓦器碗46~49はいずれも畿内産である。46は体部外面にユビオサエ後ヘラミガキが部分的に施される。体部内面には丁寧なヘラミガキが施され、見込みに平行線暗文が施される。47は体部外面にユビオサエ後、部分的なヘラミガキ、体部内面に丁寧なヘラミガキが施される。48は体部外面にユビオサエ、体部内面には圏線状のヘラミガキが施され、見込みに平行線暗文が施される。断面形が三角形を呈する高台を持つ。49は断面形が三角形を呈する高台を持つ底部片であるが、内面見込みに斜格子暗文が施される。



第12図 溝 SD04(40)、SD05(44)、SD06(41、42)、SD07(43)、土壇 SK14(45~49)  
Pit118(52)、Pit119(50、51) 出土遺物

⑥ Pit118 (第3、12図、図版18)

長径80cm、短径60cmの平面形が長円形を呈し、深さ5cmを測るピットである。出土遺物には瓦質練鉢(52)がある。

練鉢52は丸味を持つ底部から斜め上方に直線的に立ち上がる体部を呈し、口縁端面を斜位に平坦に切り取った形態である。底部ユビオサエ、体部~口縁部の内外面にはナダもしくはヨコナダが施される。

⑦ Pit19 (第3、12図、図版18)

長径80cm、短径50cmの平面形が不整形円形を呈し、深さ15cmを測るビットである。出土遺物には瓦器碗(50)、瓦質三足羽釜(51)がある。

瓦器碗50は畿内産であり、体部外面にユビオサエ、体部内面に圏線状ヘラミガキが見られる。

瓦質三足羽釜51は扁平球状を呈し、断面方形の短く突出する鈎をもつ。

## 4 小 結

名東遺跡における弥生集落の二面性については最初に述べたとおりであるが、堅穴住居跡 SA01と SA02はこの状況は的確に表現している。

住居跡 SA01出土遺物の甕は体部上位1/3に最大径を持ち、体部外面はタタキ後、ハケ+ヘラミガキによる調整が施され、体部最大径付近には刺突文を巡らせる。また、短頸壺の頭部には幅狭の多条凹線が巡り、鉢の口縁部、高坏の坏口縁部はともに短く直立、もしくはやや内傾する口縁部であり、端部を肥厚させ、口縁部外面には1~2条凹線が巡る。いずれも中期末の特徴的な形態・手法である。一方、住居跡 SA02出土遺物に見られる鉢・高坏の形態は後期末に出現するものである。

おそらく調査地周辺は、これらの土器群によって代表される集落が空間的に重複する地域なのであろう。ただ、各々の集落構造や集落変遷に伴う時間的な間隙を説明するには、まだまだ多くの調査が必要とされる。また、土壙 SK02の鉄屑片や住居跡 SA02の鉄鏃は、名東遺跡における弥生集落の実像に、製鉄に関する新たな要素を加えるものである。

溝 SD03~10は南西~北東方向の並行する溝であり新旧関係を持つが、12世紀中葉以降において同機能を有した溝群であると考えられる。さらに、後世において、これらの溝群を境界にするかのように2層の堆積が厚くなることから、水田耕作に伴う大規模な土地改変が行われたものと考えられる。土地利用形態における何らかの境界地に位置し、溝群においてもこれらに関する機能を合わせ持っていた可能性が考えられる。出土遺物には畿内産瓦器碗が顕著であり、吉野川下流域における典型的な中世土器様相を示している。また、土壙 SK14における黒色土器 B 類碗と畿内産瓦器碗の共存事例は、在地における土器様相を考える上で興味深い。

### (註)

- (1) 細部調整の用語については、山中一郎「森の宮遺跡出土の石器について」『森の宮遺跡第3、4次発掘調査報告書』1987年に従うものである。

# 阿波国分寺跡 (大師堂建設工事)

## 1 調査に至る経緯と経過

阿波国分寺跡は、鮎喰川左岸に形成された標高 T.P. +12m 前後の沖積平野の南端部、国府可矢野718番地に位置する四国霊場第15番札所国分寺を中心に所在する。

阿波国分寺跡の発掘調査の端緒は、1976年(昭和51)5月の市道拡幅工事に伴う県教委の緊急発掘調査であり、この調査では雨落ち溝と思われる遺構の一部が確認され、伽藍配置等を考察した上で当該地が南大門跡と推定された<sup>1)</sup>。

これを契機として市教委は、1978年(昭和53)から3カ年計画で、寺域と伽藍配置の確認を目的とした重要遺跡確認調査を実施した。またその後も市道拡幅工事や排水路改良工事、国分寺の庫裏新築工事などに先立つ緊急発掘調査が実施されている。これらの調査では、寺域の東・西・南・北限に関連すると想定される溝や、中心伽藍の一部を構成すると思われる建物跡や基壇状遺構、回廊跡、築地状遺構、溝状遺構などが検出されている<sup>2)</sup>。しかし、調査担当者の報告によると、検出遺構の大部分が性格に明確さを欠くものであり、現在、寺域については現国分寺をほぼ中心とした方二町域が想定されているにすぎない。また中心伽藍についても、境内地の発掘調査が十分に行われていないこともあり、明確な遺構は検出されておらず、依然伽藍配置の確定には至っていない。

なお、現国分寺境内には、かつて寺の西側の「塔ノ本」の地名が残る水田の中から出土したといわれる塔心礎が残り、また本堂横の庭園内には、跳び石に使用された建物の礎石が見られる。

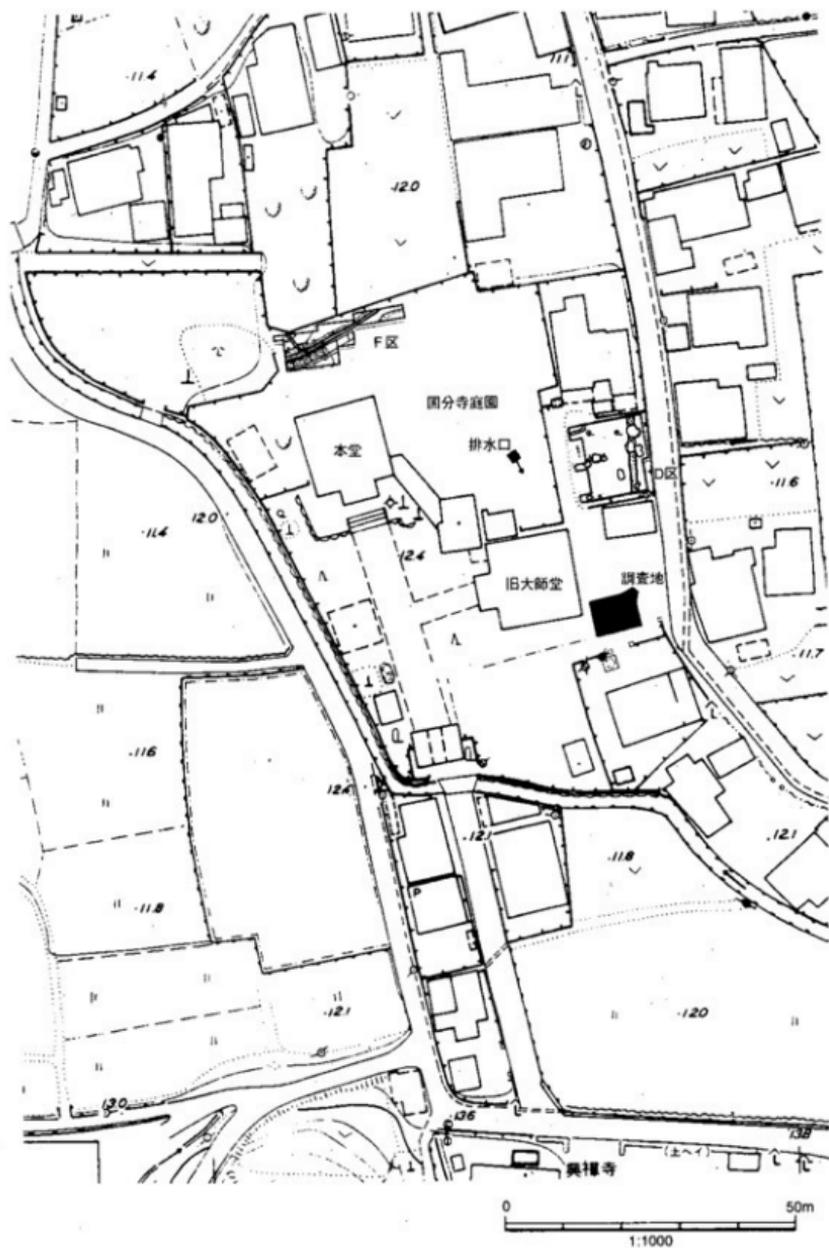
今回概要報告を行う調査は、1993年(平成5)1月25日夕刻の不慮の出火から類焼した大師堂(以下「旧大師堂」という)の新築に先立ち実施したものである。国分寺跡は県指定史跡であることから、大師堂新築にあたっては、寺側から県教委へ史跡の現状変更許可申請書の提出が必要となった。発掘調査は、この手続き終了後に埋蔵文化財発掘届出書を受けて、1996年(平成8)2月5日から3月1日までの間、約50㎡を対象に実施した。

## 2 調査の概要

調査地の現地表面は、T.P. +12.3mを測る。今回の調査では、第1遺構面として暗渠(排水溝)とピット(柱穴)、第2遺構面として溝を検出した(第2図)。また、古墳時代の須恵器、弥生土器、叩石なども出土している。以下、主な検出遺構と出土遺物について概要を述べる。

### (1) 暗渠 SD01 (第3図・図版1、2)

調査区南西隅で、緩やかにカーブを描きながら南東-北西方向に延びる暗渠を検出した。後述



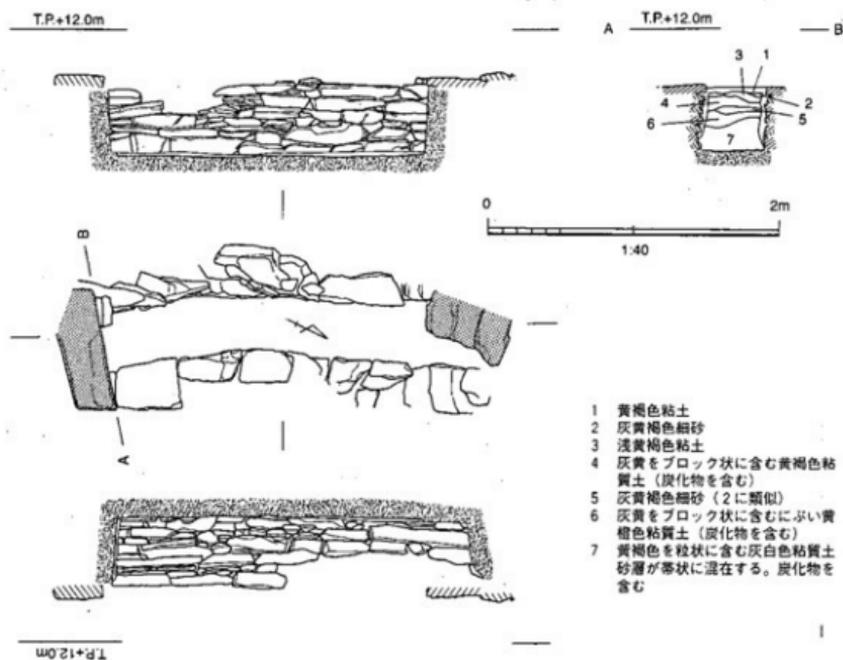
第1図 調査地位置図



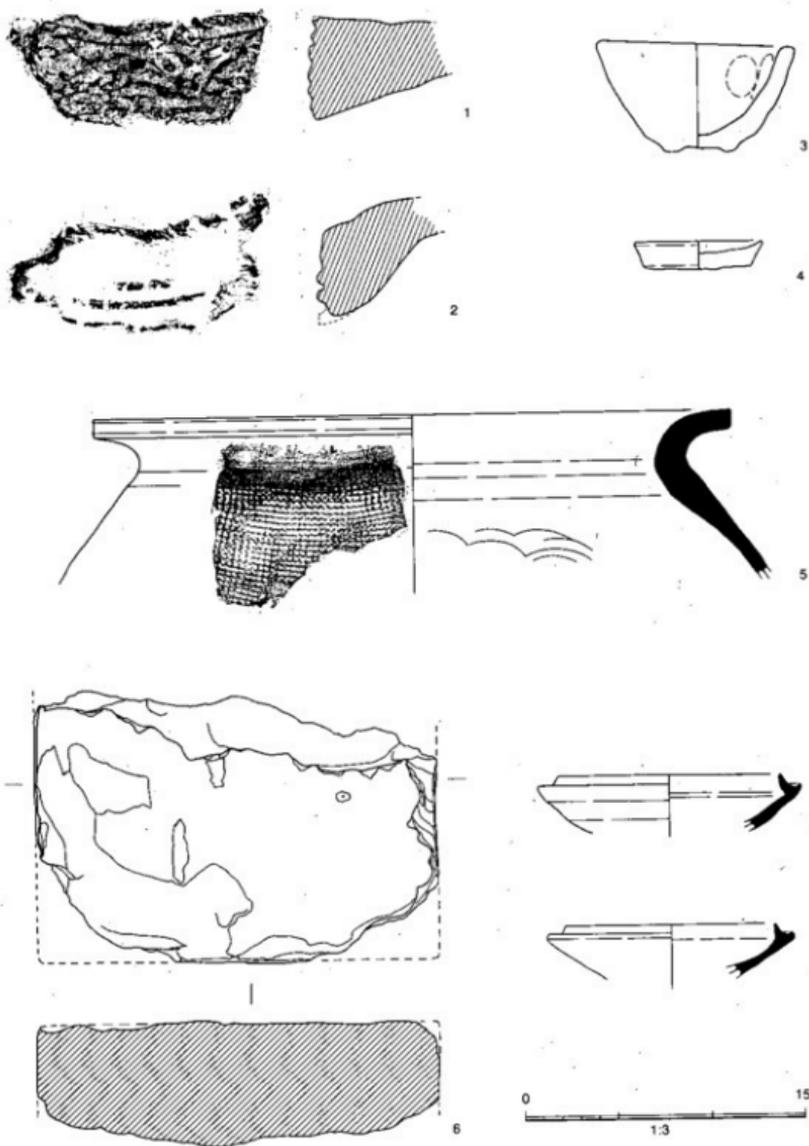
するピット群と同一レベルでの検出を行い第1遺構面としたが、暗渠の掘形は第10層上面から認められ、ピット群より時期が下るものである。暗渠は、水道パイプ埋設時の掘り込みにより一部破されてはいたが、長さ80cm、幅30cm、厚さ10cm程度の結晶片岩の板石による蓋が丁寧に施されている状況が窺えた。溝の両側壁にも結晶片岩が用いられ、一部小割りの石も使用しているが平石積みを基本とし、壁面を整え垂直に立ち上げる丁寧な構築がなされている。底には敷石や張石はなされていない。暗渠の内法幅、深さはともに約40cmを測り、断面正方形を意識して築かれたものと思われる。暗渠内には蓋石直下まで埋土が充満堆積していた。埋土は一部に細砂層が認められるが、概ね粘質土壌の堆積であり、水路としての機能を有しつつも、ほとんどの時期を通じて澁んだ状態が長かったことが想定される。暗渠の年代を決定できる遺物は出土していない。

(2) ピット(SP)群 (第2図・図版4)

第11層上面 (T.P.+11.9m前後) を基本としたレベルで、40余基のピットを検出した。このうちSP29とSP30は遺構内に結晶片岩の小礫を複数個有し、ほぼ同じような形態であることから、



第3図 暗渠 SD01



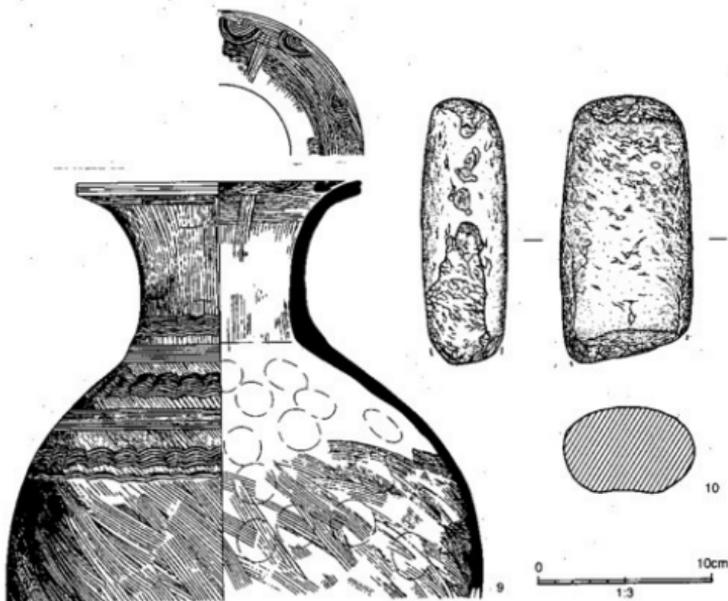
第4図 出土遺物(1) (1~6:溝SD02、7、8:包含層)

同一建物の柱穴になることが想定される。柱間寸法は2mを測る。この両柱穴から北西あるいは南西方向の調査区外へ一連の柱穴が等間隔で延び、掘立柱建物跡が存在する可能性がある。また、SP8、SP16、SP37は1.8~1.9mのほぼ等間隔で東西方向に並び、塼か榦を構成していた可能性がある。いずれも柱穴内からの出土遺物はなく、時期は不明である。

(3) 溝SD02(第2、4図・図版5、6)

第13層上面(T.P.+11.7m前後)を基本としたレベルで検出された南西-北東方向に延びる幅約1.5m、深さ50~60cmの溝である。溝内からは多量の瓦片が出土しているが、瓦当模様の分かるものは宝相華唐草文軒平瓦(1)と重郭文軒平瓦(2)の2種類が数点確認されたのみで、瓦当を残す軒丸瓦は出土していない。平瓦は縄目叩文のものが多い。その他の遺物では、粘土焼成の甗(6)や凝灰岩製の甗の破片、手捏ねの高台付椀(3)、底部ヘラ切りの土師器小皿(4)、亀山産の甕(5)などが僅かに出土している。

なお、溝SD02の南側で瓦列が僅かに検出されている。浅い落ち込みに沿って東西方向に延びており、調査区東壁面で溝状遺構の痕跡として捉えることも可能である。この瓦列は、第1遺構面として検出したSP37-SP8-SP16の配列方向に一致し、ほぼ並行するものであり、この柱穴



第5図 出土遺物(2)

列を塙または橋と仮定した場合、これに関連する遺構であった可能もある。

#### (4) その他の出土遺物(第4、5図・図版7、8、9)

古墳時代の遺物として、TK208に比定される須恵器環(7)、(8)が出土している。また調査区北壁沿いに設定したトレンチ内から弥生土器壺(9)と叩石(10)が出土している。弥生土器壺(9)は、頸部から体部上半にかけて櫛描波状文と櫛描直線文を施した中期の広口壺である。叩石(10)は太型蛤刃石斧を転用したもので、斧身の上下両端を作業面として使用しており、刃部は完全に滅失している。石材は変斑れい岩である。なお、これらに伴伴する状態で出土した砂岩の自然礫(図版7)は、台石として使用されたものかも知れない。

### 3 小 結

今回の調査は寺院境内地で実施したものであるが、中心伽藍の遺構の検出には至らなかった。

溝SD02は、平安時代の宝相華唐草文軒平瓦(1)、奈良時代後期の重郭文軒平瓦(2)などが混在して出土しているが、亀山産甕(5)などの出土遺物から13世紀末頃の年代が与えられる。また溝SD02は南西-北東方向の溝で、条里地割の南北方向に一致するとされる伽藍中軸線には直交しない溝である。この溝と同一方向に走る溝が、1980年度(昭和55~56)の第3次調査で本堂北側に設定したF区で検出されている(第1図)。<sup>9)</sup>その溝からも奈良~平安時代の瓦と中世以降の瓦質土器(羽釜)などが混在して出土しているようである。両者の関連性が留意されよう。両溝の距離は約70mを測る。

第1遺構面のピット(柱穴)列は、13世紀末以降に造営された掘立柱建物や櫓などの可能性を有するものである。阿波国分寺の中~近世における堂宇造営などの実態を究明していく上で、今後、当該期の遺構がより広い範囲で検出されることが望まれる。<sup>10)</sup>

暗渠SD01は、北西約20mにある桃山様式といわれる庭園に向かって延びており、庭園の池の中の南東部に開口する水路の口(図版3)に至るものと考えられる。この開口部には結晶片岩の自然石を穿ったものを掘えているが、その奥では平石積みにより水路の側壁が構築されており、暗渠SD01との共通点が看取される。開口は現状で約35cm四方を測る。この庭園の池には、入水口と排水口の所在が明確にされておらず、池泉であったか枯池であったかという問題点が存在するが<sup>11)</sup>今回の調査で庭園池の排水溝と思われる暗渠が検出されたことは、この問題の解決の糸口になり得るであろう。この暗渠SD01を排水溝と考えるのは、庭園内の開口部より幾分レベルが低いこと<sup>12)</sup>埋土に粘質土が充満していることなどが理由である。埋土の堆積が進行した時点でも、時間を要して僅かずつ排水を行うことに何ら支障もなく、排水溝としての機能は十分に果たされていたであろう。では入水口の所在はという観点に及ぶが、現状で確認できない以上は、やはり今後の庭園整備等に伴う発掘調査に期するところとなろう。

なお庭園の作庭時期についても、庭園の様式や規模、本堂建立との関係<sup>1)</sup>、文献資料の記述内容などを論拠に異論が存在している。作庭時期を新しく見るものには、天保13年(1842)頃とする説<sup>2)</sup>があるが、暗渠 SD01は文政12年(1829)に建立された旧大師堂の下を通ることが想定されるので、作庭時期は遅く見ても文政12年を下ることはない。

(註)

- (1) 徳島県教育委員会『徳島県文化財調査概報 1976年度』1978年
- (2) 角田文衛編『新修国分寺の研究 第5巻上 北海道』1978年
- (3) 徳島市教育委員会『阿波国分寺跡第3次調査概報 1980年度』1981年
- (4) 寛保元年(1741)に丈六寺先住の吼山養壽が曹洞宗寺院として中興開山する以前には、本格的な堂宇はなく草庵や弥勒堂などの小堂が存在する程度の荒涼とした時期があったことが『四國遍路日記』(1653年)や『四國偏禮霊場記』(1689年)の記述や挿図から窺える。
- (5) 日本庭園研究会『阿波国分寺庭園調査報告書』1993年
- (6) 庭園池内の開口部の発掘を行っていないため、正確な高低差は不明である。
- (7) 現在の本堂は文化8年(1811)に建立されたものであるが、庭園の一部を壊すかたちで建立されていることから、作庭時期をこの年以降とするには矛盾があるとする考えである。
- (8) 真貝宣光「阿波国分寺の改宗と伽藍再建」『三好昭一郎先生古希記念論集 社会と信仰・阿波からの視点』1999年



# 田宮遺跡 (店舗建設工事)

## 1 調査に至る経緯と経過 (第1、2回)

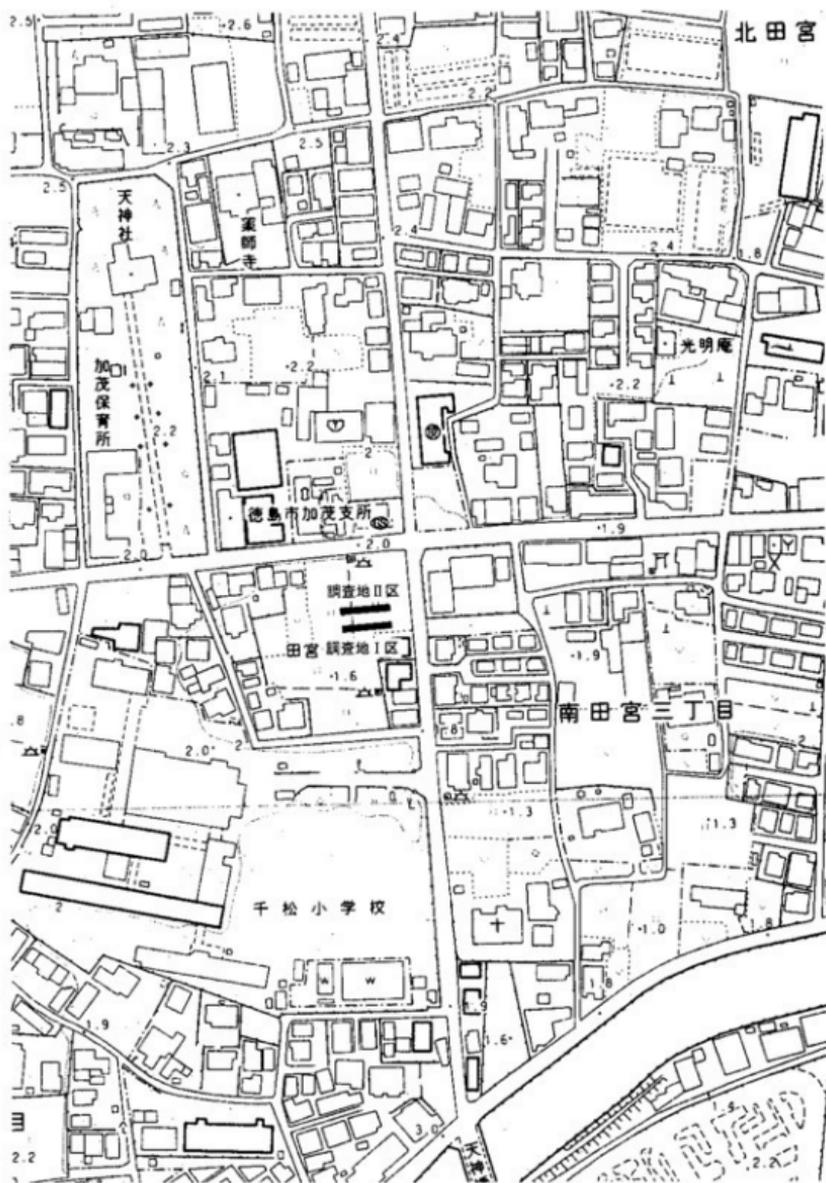
田宮遺跡は吉野川下流域に形成された標高T.P+2.0mを測る沖積微高地上に位置する中近世の集落遺跡である。遺跡発見の経緯は県道徳島鴨島線改良工事に伴うものであり、その発見は近年に至るものである。従来、徳島市北常三島～矢三・中島田を結ぶ県道徳島鴨島線(通称田宮街道)沿いにおける遺跡の存在は全く認識されていなかった。しかし、かつて県道徳島鴨島線改良工事においては、鎌倉時代以降の中世集落遺跡として名高い「中島田遺跡」の発見事例があり、「田宮遺跡」についても、吉野川下流域の低湿地帯における土地開発ならびに集落経営に関する新たな知見として理解されるものである。

調査は県道徳島鴨島線改良工事による店舗移転に伴うものである。調査地周辺地域では1996年から断続的に、道路改良に伴う発掘調査ならびに試掘調査が埋蔵文化財センターにより実施されており、13世紀以降の集落の存在が明確化されている。しかし、遺跡としての広がりや把握するまでには至っておらず、地形図による旧地形の読み取りも困難な地域であることから詳細な調査の積み上げ以外にこの問題は解消されることはない。

このように埋蔵文化財包蔵地域として空間的な広がりや把握されない現状において、今回の調査では、遺構・遺物の検出により当該地が遺跡としての広がりを持つ地域であるのか否かを明瞭にすることに主眼をおき、幅2m、延長20mの東西方向のトレンチを2箇所(調査地Ⅰ区・Ⅱ区)に設定し発掘調査を実施した。



第1図 調査地位置図

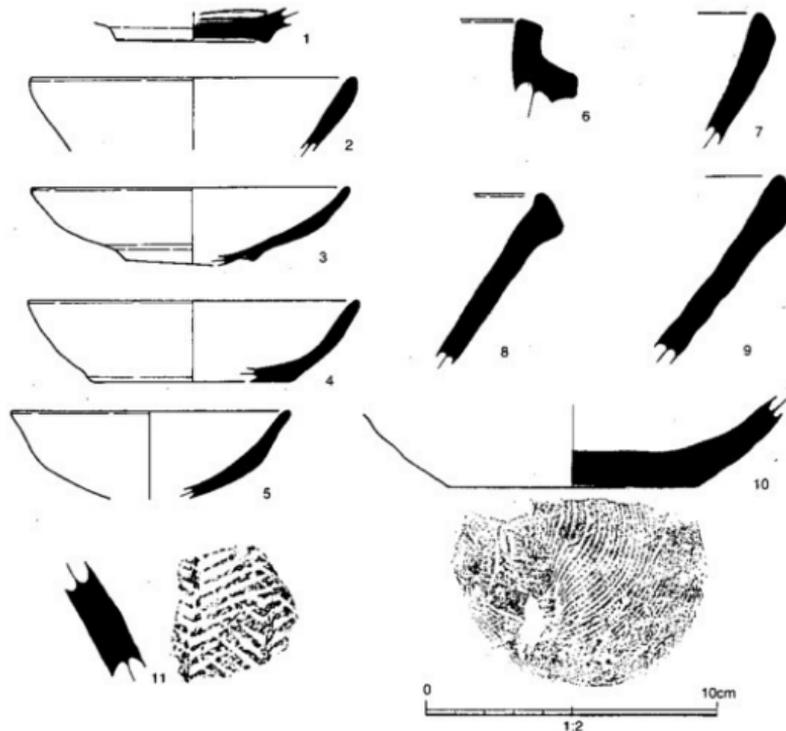


第2図 調査地概略図

## 2 基本層序 (第3、4図、図版5)

調査地周辺の現地表面は標高 T.P.+1.8m を測り、現代水田耕作土層 (0) 下に 1～5 層が堆積する。以下、上位より概略する。

- 1: 層厚 5cm を測る黄褐色砂質シルトである (Fe 沈澱層: 床土)。
- 2: 層厚 10～20cm を測るにぶい黄色シルトである (上位に Mn 汚染: 旧耕作土)。2 層上面から切り込む不明遺構が見られる (第 4 図: 断面図 13)。
- 3: 層厚 10～20cm を測る黄褐色シルトである (旧耕作土)。3 層上面から切り込む溝 (第 4 図: 断面図 5～10: 溝) が見られる。
- 4: 層厚 20cm を測る暗灰色極細砂～シルトであり、中世の遺物包含層である。  
出土遺物について概略する。



第 3 図 包含層 (4 層) 出土遺物

碗1は内面底部見込みに平行線暗文が施された畿内産瓦器碗である。碗2は口縁部の器壁が厚く吉野川下流域の遺跡において散見される在地産の瓦器碗である。碗3は器高が低く、高台は簡略化された扁平な断面三角形を呈する土師器碗である。碗5は口径および器高が縮小化する無高台の土師器碗である。土師器坏4は底部と体部の屈曲が明瞭であり、体部はわずかに内弯しながら立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。土師器羽釜6は断面形が台形を呈する厚みのある鐏を持ち、口縁端面は平坦であるが、外側に傾斜する。練鉢7～10は東播系であり、口縁端部を上方および上下に拡張するものがあり、底部片10に回転糸切り痕が見られる。甕11は体部片であるが、矢羽根の叩き痕が施される。

- 5：明黄褐色～にぶい黄橙色細砂～シルトであり、吉野川下流域における旧水系の沖積作用による堆積層と考えられ、遺構検出ベース層である。

#### 4 検出遺構と出土遺物（第4図、図版1、3）

基本層序において概略した明黄褐色～にぶい黄橙色細砂～シルト（5層）上面において、ピット溝・土塋・土墳墓・不明遺構を検出している。以下、主な遺構・遺物について概略する。

##### ① Pit01（第4、5図、図版6）

調査地Ⅰ区において検出した平面形が円形を呈し、径15cm、深さ10cmを測る。出土遺物には土師器碗（12）がある。

碗12は口径10.8cm、残存器高3.2cmを測り、高台は剥落している。

##### ② Pit02（第4、5図、図版6）

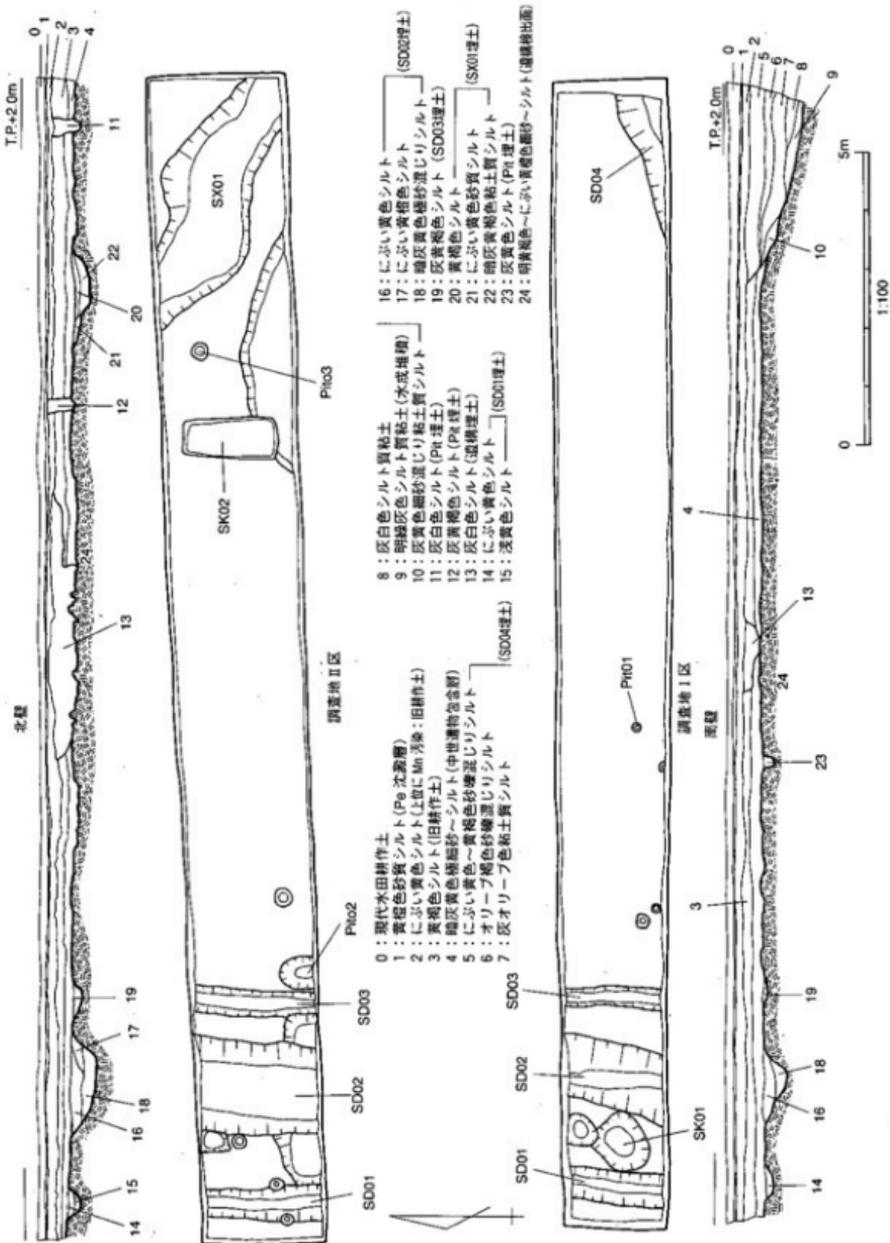
調査地Ⅱ区において検出した平面形が長円形を呈し、長径60cm+ $\alpha$ 、短径60cm、深さ25cmを測る。出土遺物には土師器碗（13）がある。

碗13は口径10.8cm、器高2.5cmを測り、無高台である。

##### ③ Pit03（第4、5図、図版4、6）

調査地Ⅱ区において検出した平面形が円形を呈し、径30cm、深さ5cmを測る。底部に土師器坏（14）が正位置で置かれた土師器埋納ピットである。

坏13は底部と体部の屈曲は不明瞭であり、体部はわずかに内弯しながら立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。



第4図 地勢配置図・断面図

④ 土壙 SK01 (第4、5図、図版6)

調査地Ⅰ区において検出した平面形が長辺1.6m、短辺70cmの長方形を呈し、深さ25cmを測る。  
出土遺物には瓦器碗(18)がある。

碗18は器壁が厚く、体部中位から外反しながら口縁部に至る。

⑤ 土壙墓 SK02 (第4、5図、図版6)

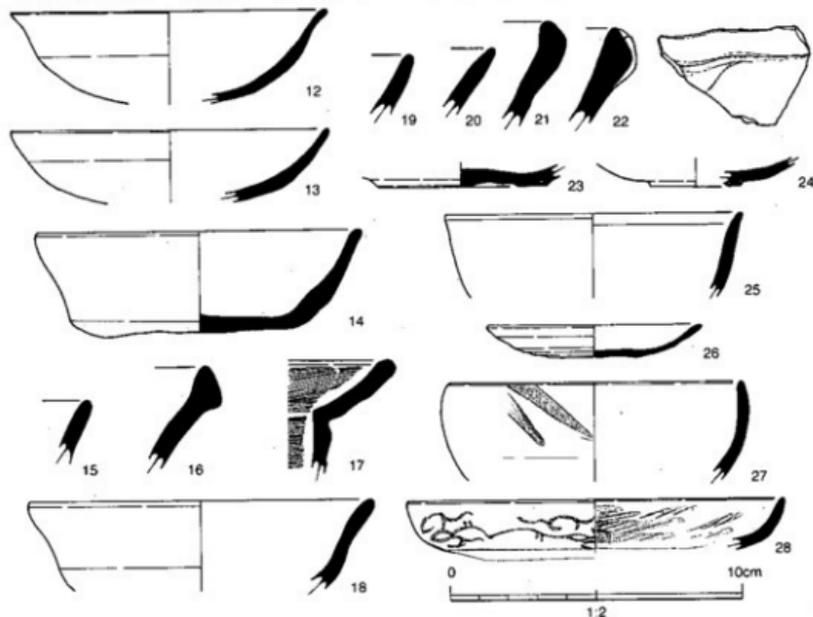
調査地Ⅱ区において検出した平面形が長辺80cm、短辺60cmの不整長方形を呈し、深さ25cmを測る。平面形態および壁面が垂直であり、底部が平坦であることから土壙墓と考えられる。

出土遺物には瓦器碗(15)、練鉢(16)、土師器鍋(17)がある。

碗15は碗18と同様に器壁が厚い。練鉢(16)は口縁端部を上下に拡張する東播系である。鍋17は口縁部がくの字状に屈曲し、口縁部~体部内面には横位の細かなハケが施される。

⑥ 溝 SD02 (第4、5図、図版2、4)

調査地Ⅱ区において検出した幅1.6m、深さ35cm、断面形が不整逆台形を呈する南北方向の溝



第5図 Pit01(12)、Pit02(13)、Pit03(14)、土壙 SK01(18)、SK02(15~17)、  
溝 SD02(19~25)、SD04(26~28) 出土遺物

であり、調査地Ⅰ区において連続する溝を確認している。出土遺物には瓦器碗(19、20、23、24)、東播系練鉢(21、22)、白磁碗(25)がある。

碗19、20は器壁が厚く在地産である。底部片23は扁平な低高台をもつ。23、24は畿内産である。練鉢22は口縁端部を上方にわずかに拡張させ、21は拡張度が高い。

#### ⑦ 溝SD04(第4、5図、図版2)

調査地Ⅰ区において検出した3層上面から切り込む東西方向の溝と考えられる。出土遺物には備前小皿(26)、肥前系丸碗(27)、肥前染付皿(28)がある。

## 5 小 結

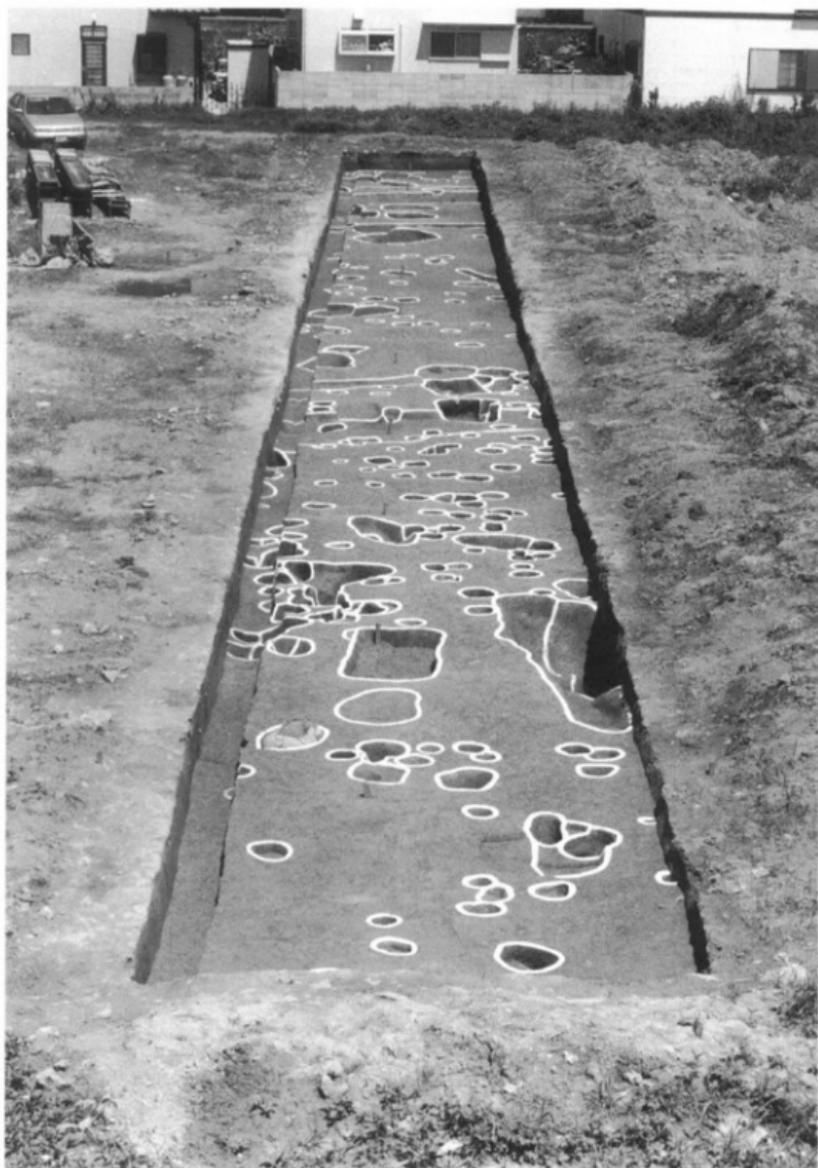
調査地における遺構密度は希薄である。建物跡等の生活諸遺構の確認はなされていないが、南北方向に並走する南北方向の3条溝SD01~03、土墳墓と考えられるSK02の存在から、当地は集落の一面に位置するものと考えられる。集落の範囲ならびに性格については明瞭ではないが、おそらく13世紀以降の吉野川下流域の低位沖積地においては、中島田遺跡を拠点に小規模な微高地上に集落が点的に営まれたものと想定される。そして、集落の存続期間についても、近世以降においても集落は存在するが、13世紀中葉~14世紀中葉を中心とした比較的短期集中の集落経営で停まる可能性が考えられる。この地域における拠点的な集落である中島田遺跡の集落経営に同調するのかもしれない。

出土遺物において、碗形態には畿内産の瓦器碗が見られるが、在地産の瓦器碗や土師器碗が目立つ。また、中島田遺跡では特徴的に見られる吉備系土師器碗は認められない。中島田遺跡のような流通拠点の集落遺跡とはその性格差は明瞭であるが、東播系の片口鉢が比較的顕著に認められることから、搬入品の在地における流通には、器種により差異が生じていたものと考えられる。

吉野川下流域の広大な低位地帯において、点的な存在を示すであろう中世集落の把握は容易ではないが、田宮遺跡は中世集落の在り方を考える上での情報を提供する新たな遺跡として検討しなければならない。

写 真 図 版

I 南蔵本遺跡 (住宅開発工事)



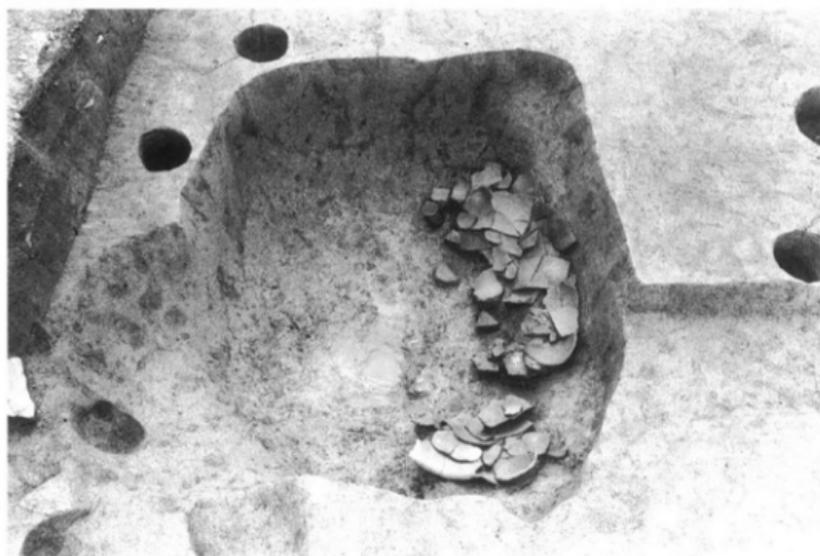
遺構検出状況

西より



土壌 SK14遺物検出状況

南より



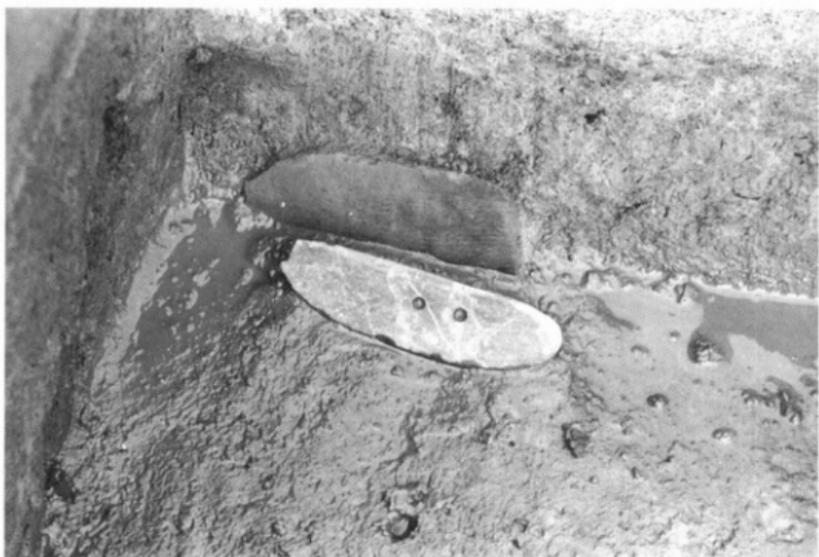
土壌 SK14遺物検出状況

東より



土壙 SK23遺物検出状況

南より



土壙 SK23遺物検出状況

南西より



土壌 SK29、SK32遺物検出状況

南東より



土壌 SK29、SK32遺物検出状況

南西より



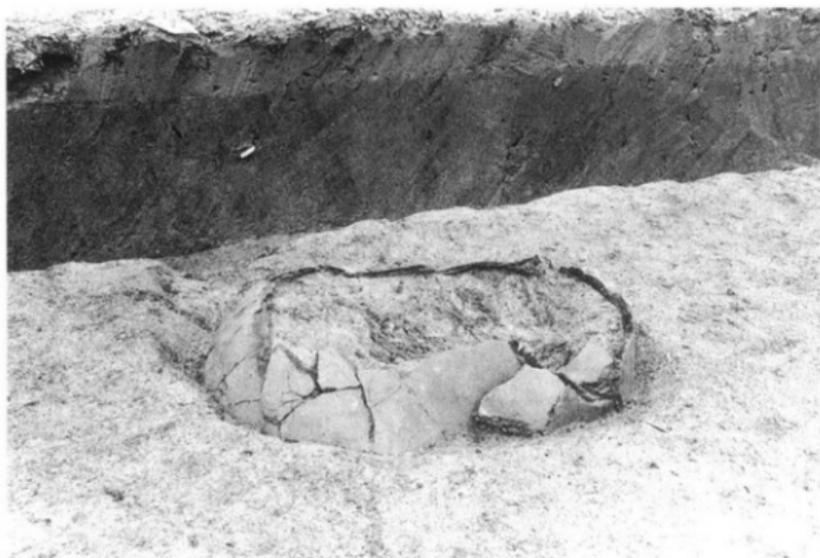
土器棺墓 SI01

南西より



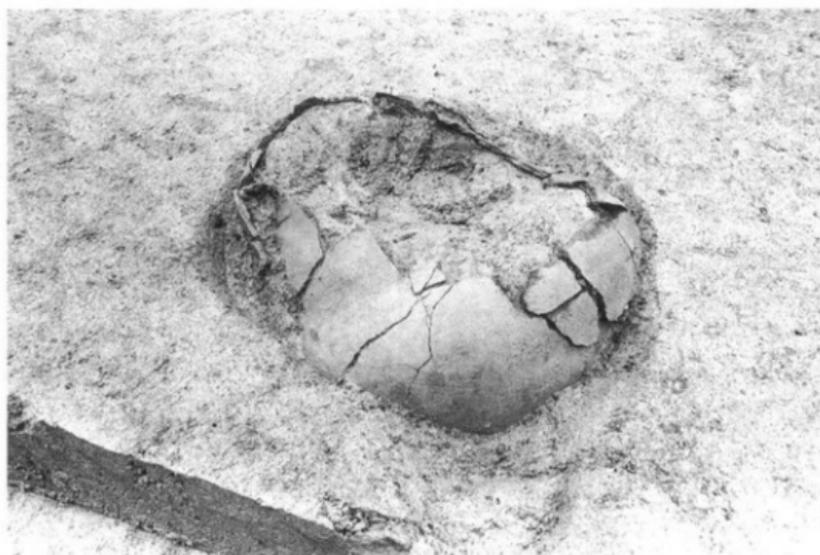
土器棺墓 SI01

南東より



土器棺墓 SI02

南西より



土器棺墓 SI02

北西より



土器棺墓 SI02

北より



土器棺墓 SI02

西より



土器棺墓 SI02

北東より



土器棺墓 SI02

西より



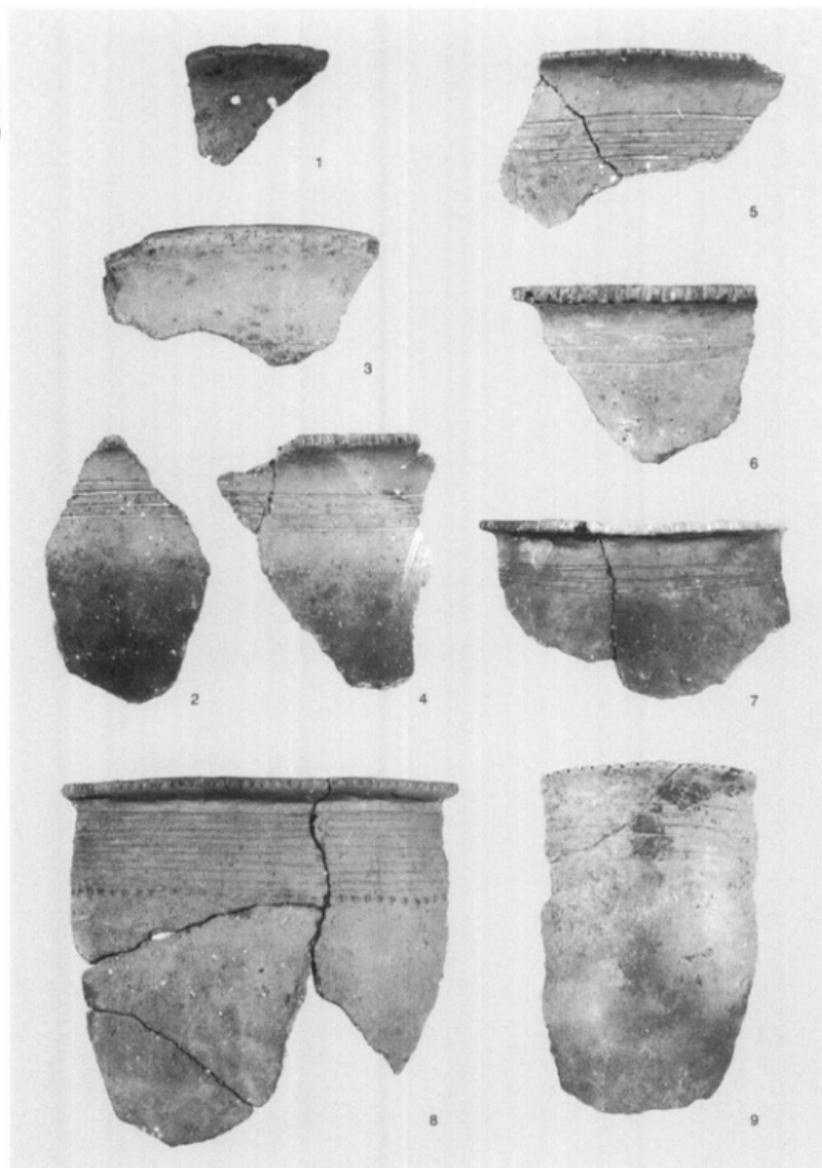
土壌 SK04、SK05検出状況

西より



土壌 SK04、SK05検出状況

北西より



清 SD03 (1~3)、土壙 SK21 (4~7)、SK23 (8、9) 出土遺物



土壙 SK14出土遺物



12

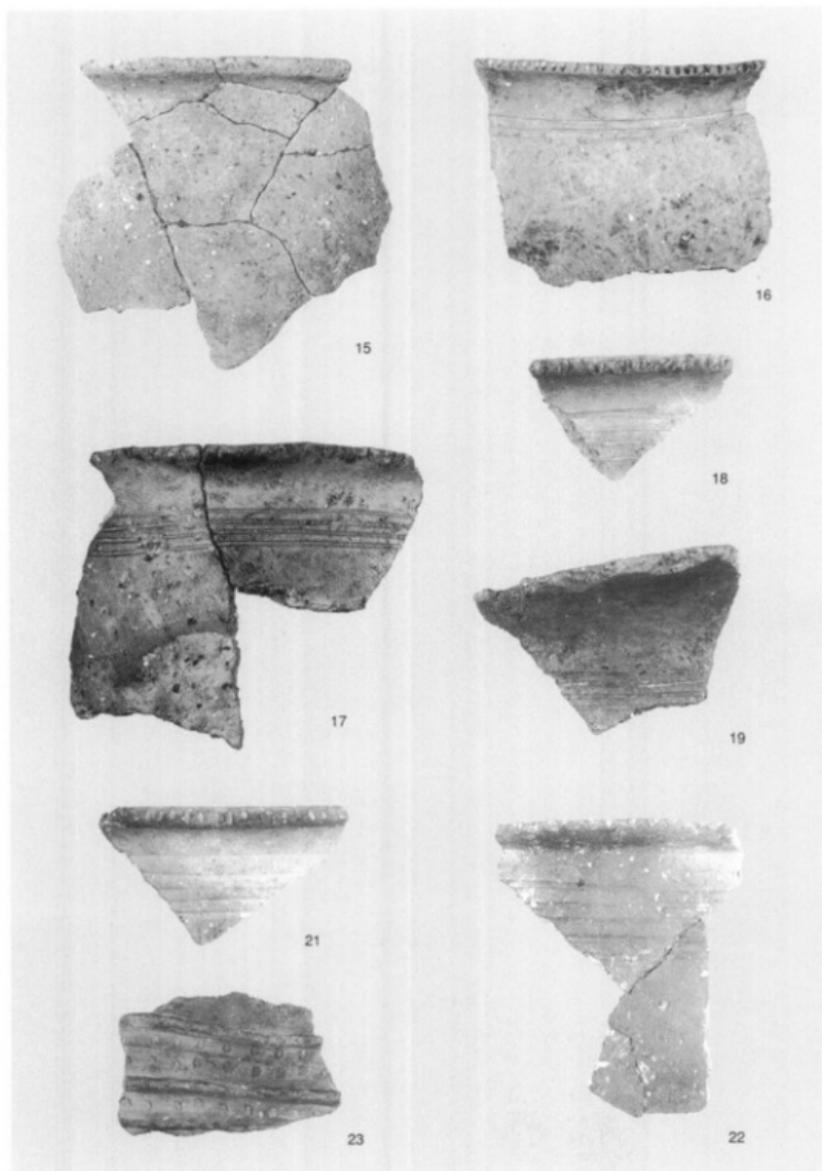


13

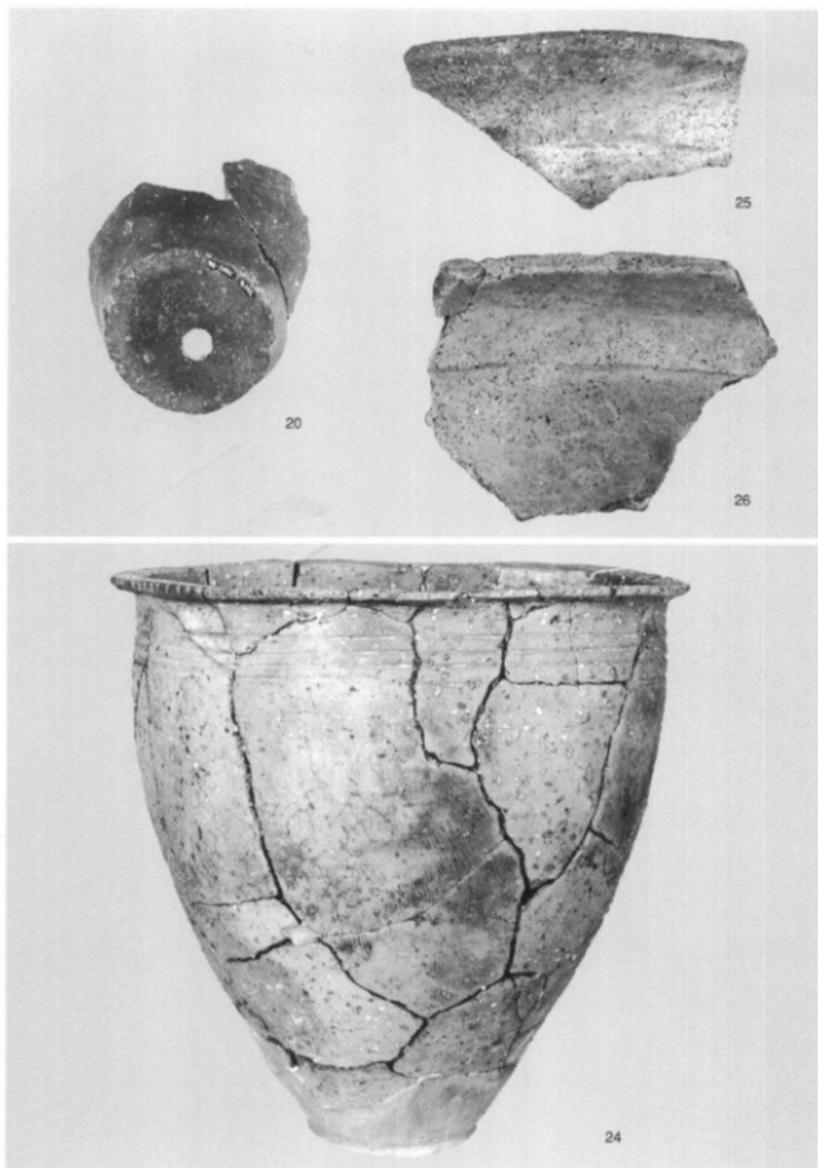
土壙 SK14出土遺物



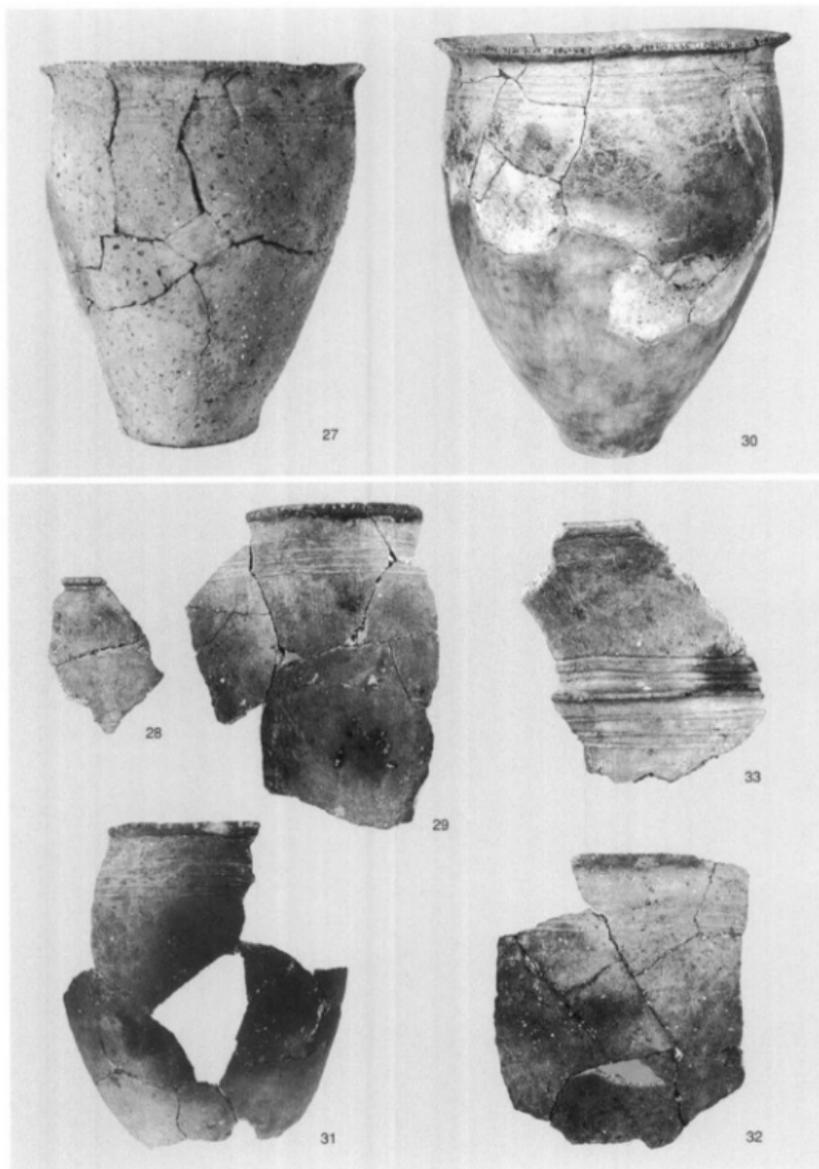
土壺 SK14出土遺物



土壙 SK27 (15)、SK28 (16~19)、SK36 (21~23) 出土遺物



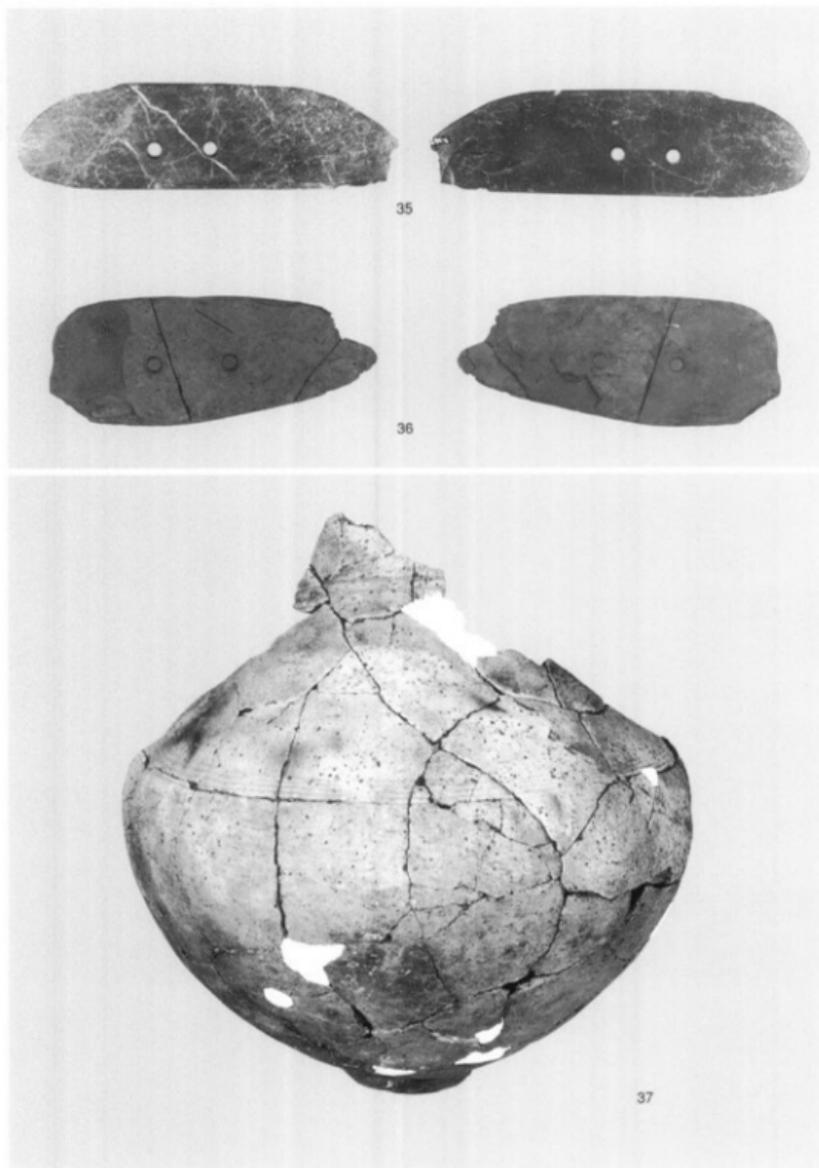
土壇 SK18 (20)、SK32 (24)、SK38 (25)、SK39 (26) 出土遺物



土壙 SK29出土遺物



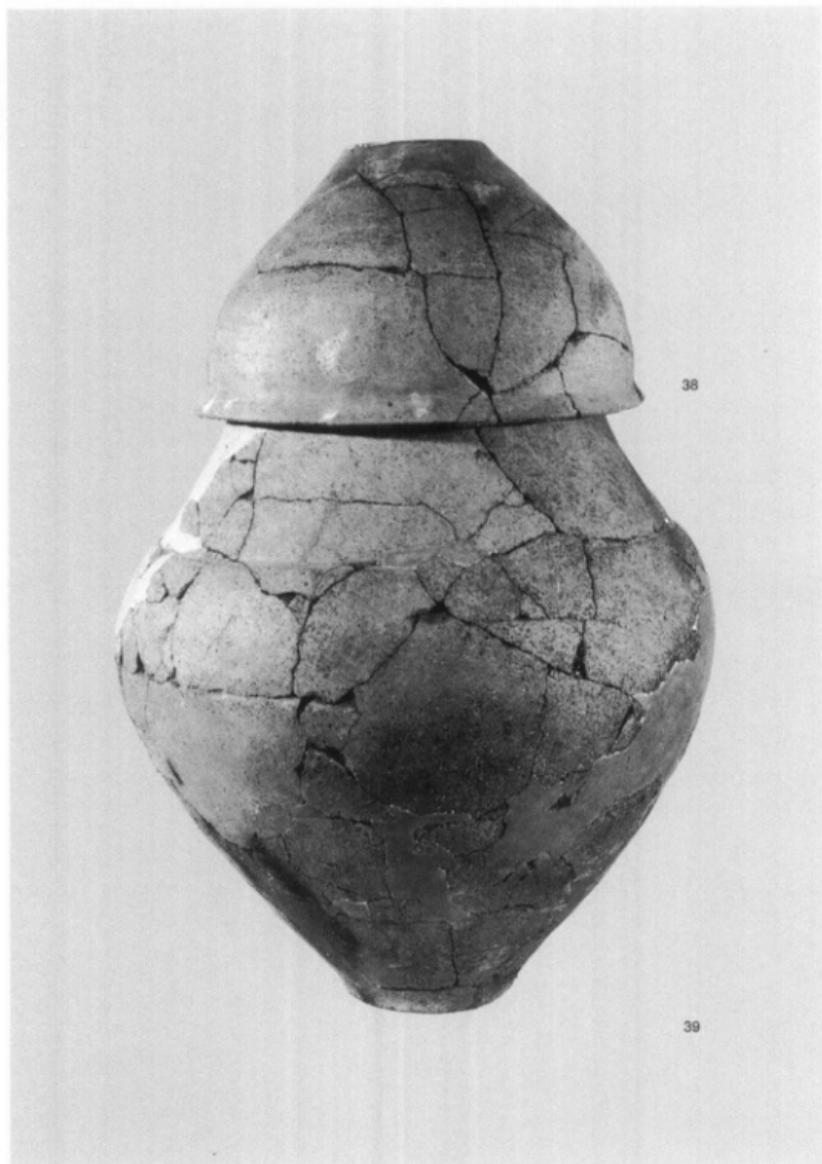
土壙 SK29出土遺物



土壙 SK23 (35)、SK36 (36)、土器棺墓 SI01 (37) 出土遺物



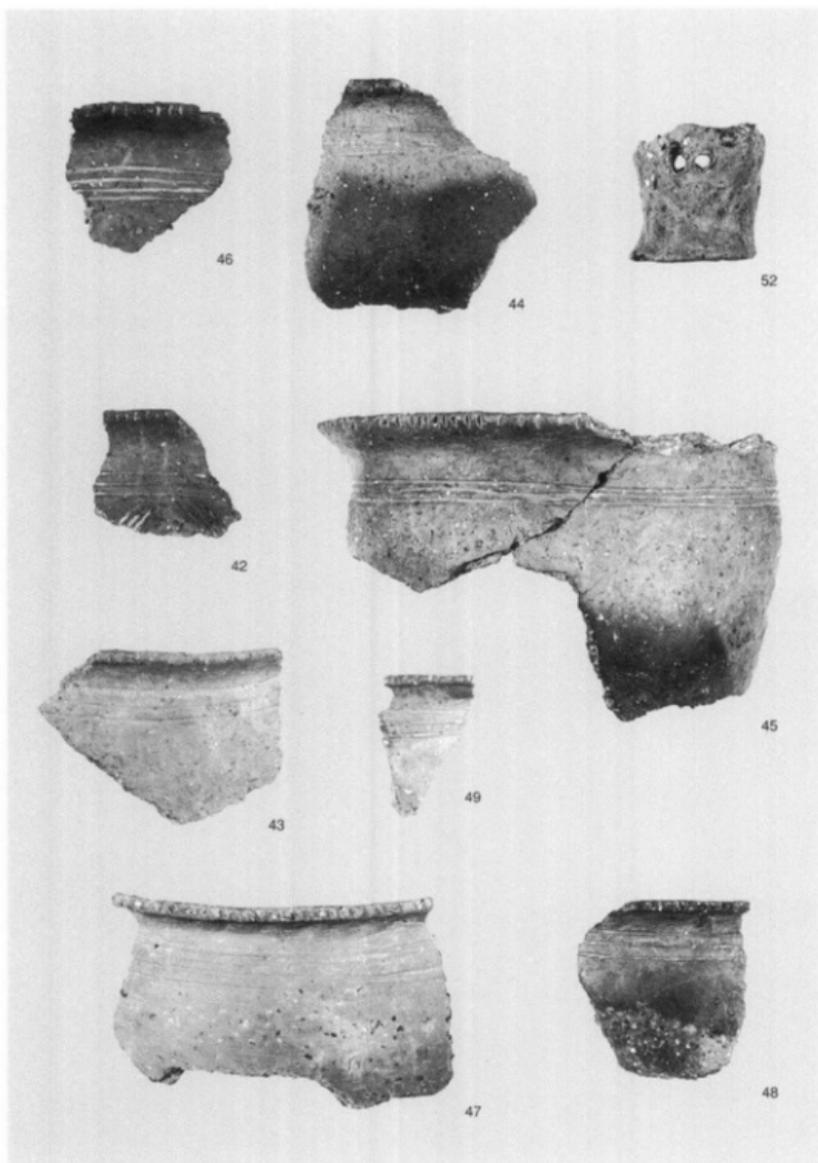
土器棺墓 S102出土遺物



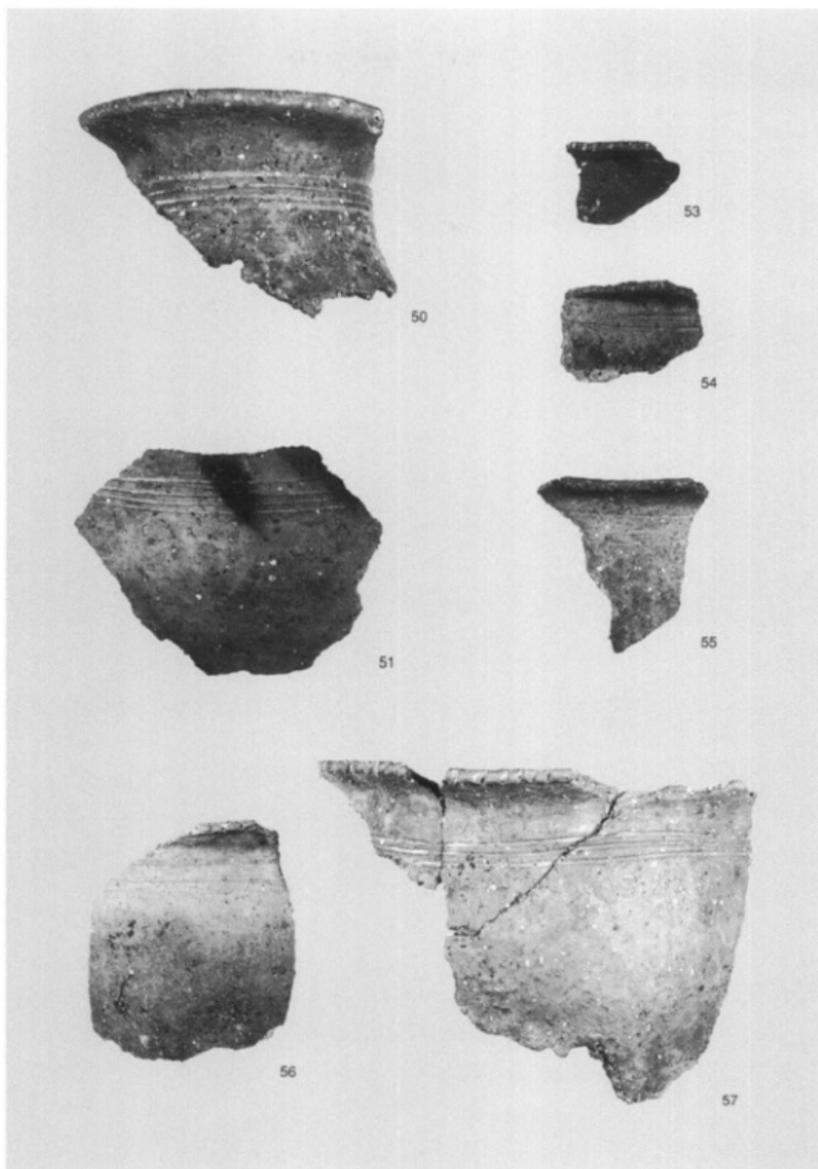
土器棺墓 SI02出土遺物



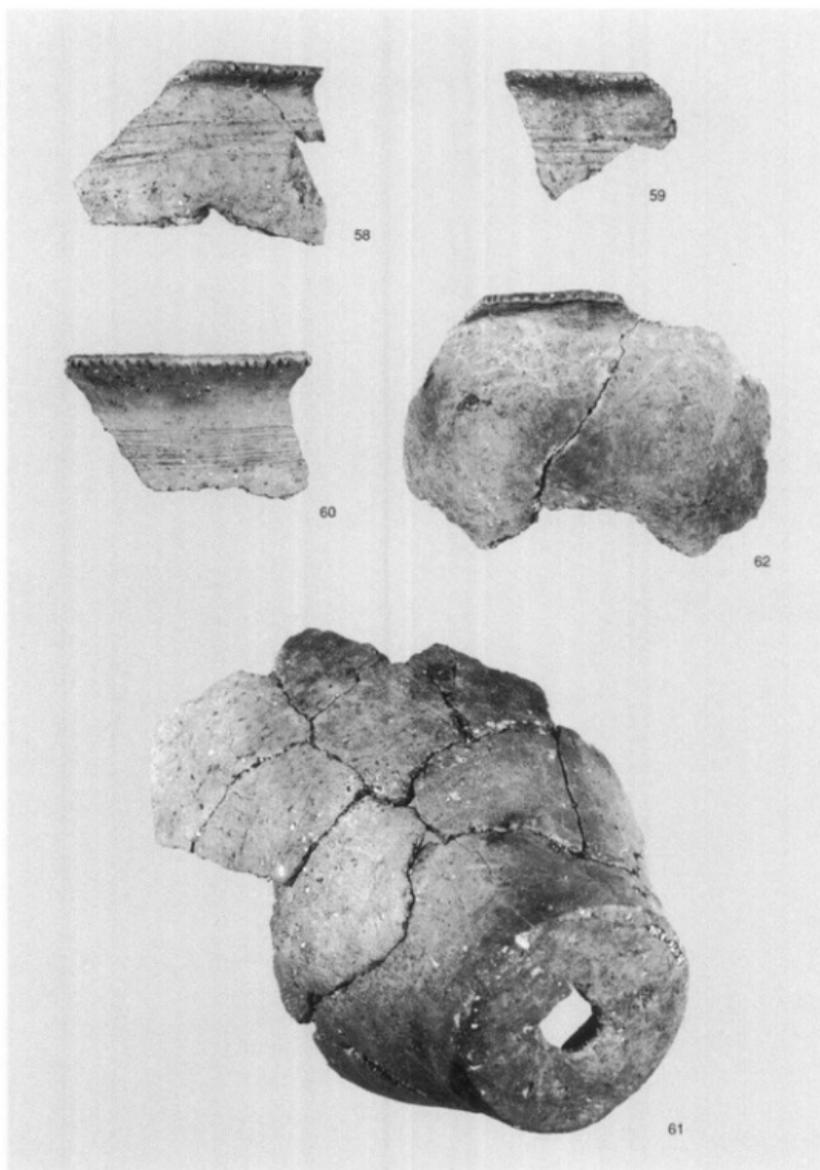
土壙 SK04出土遺物



土壙 SK04出土遺物



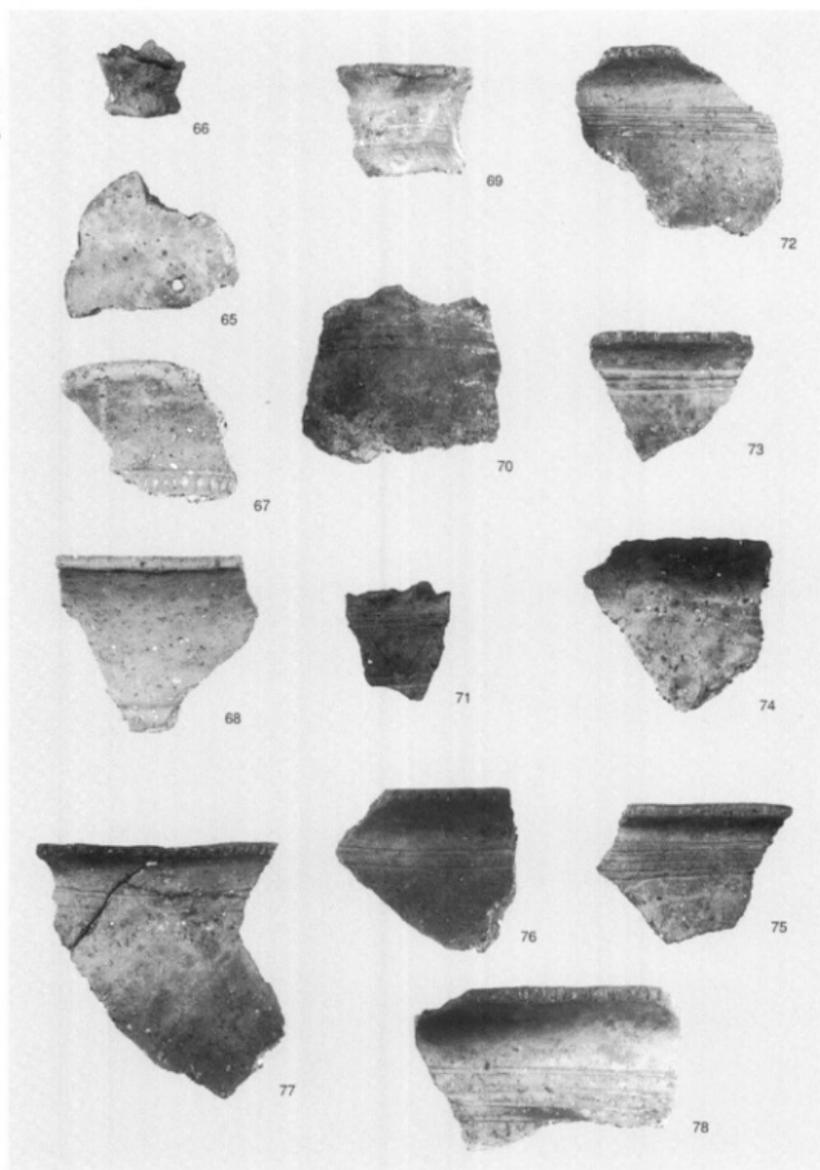
土壌 SK04出土遺物



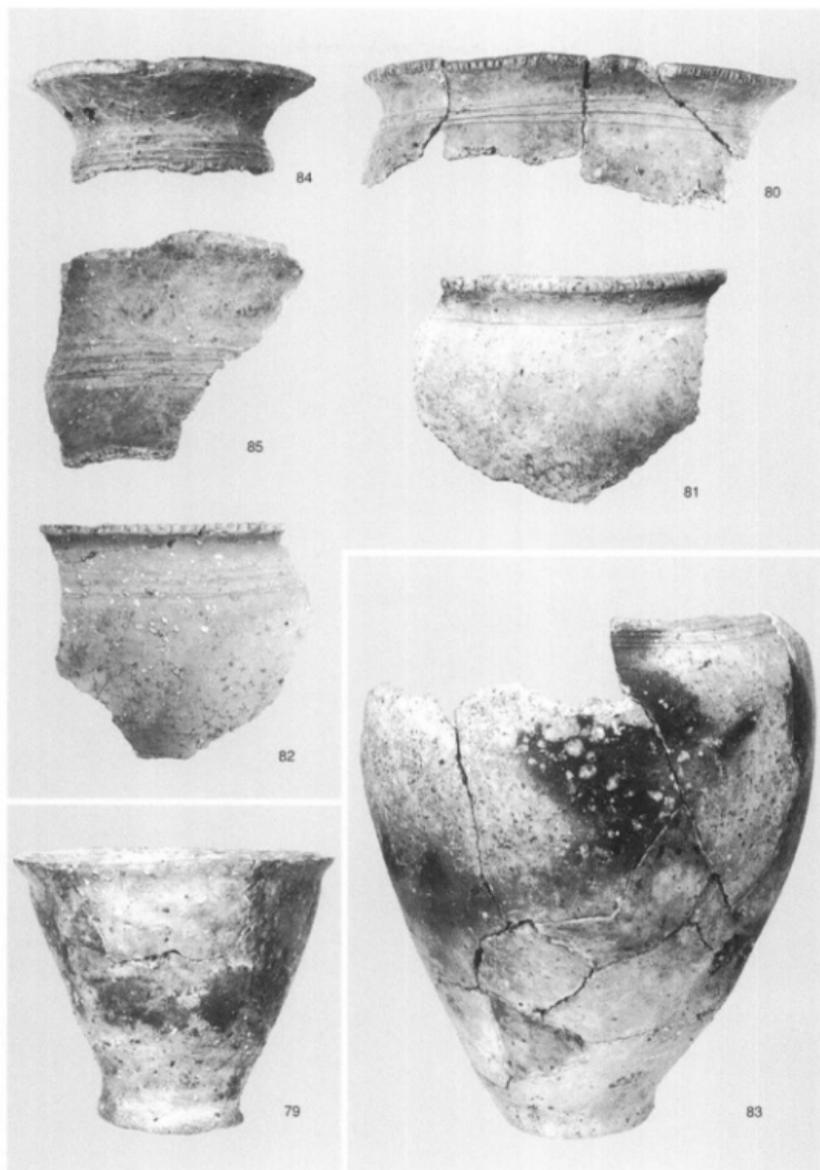
土壙 SK04出土遺物



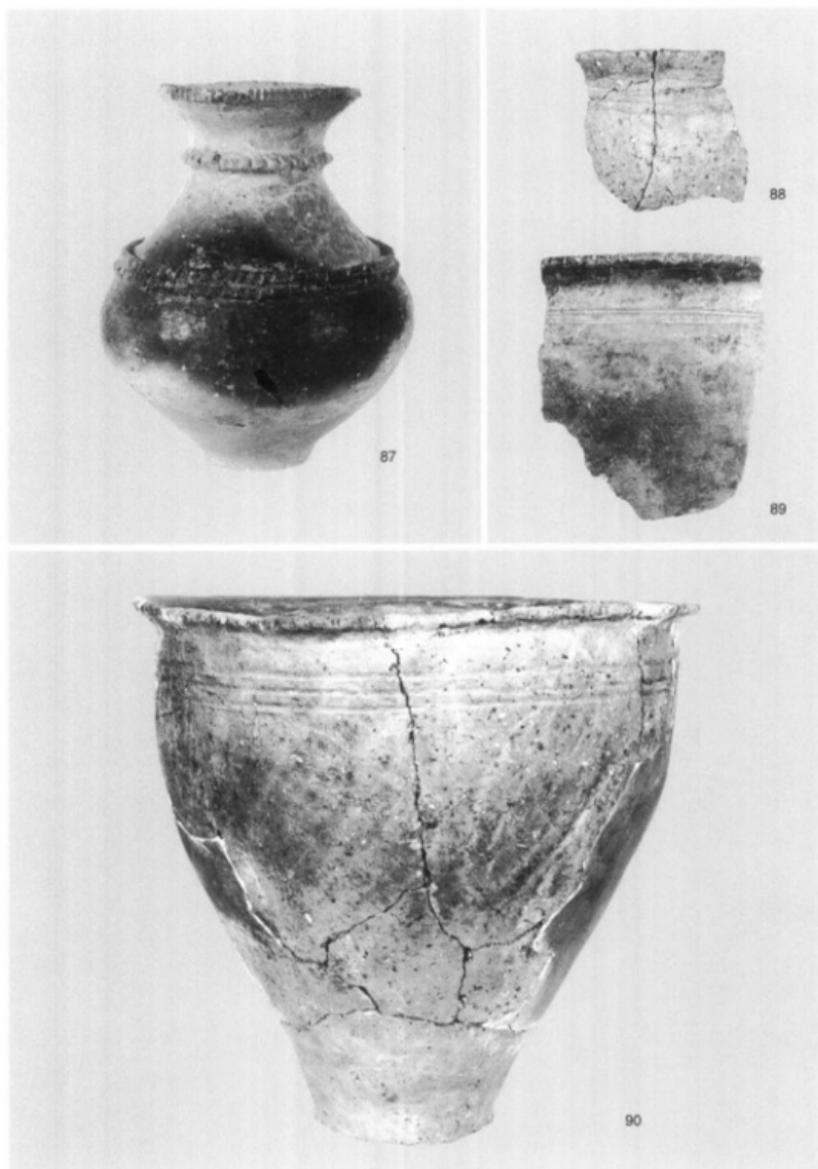
土壙 SK04出土遺物



土壙 SK04 (66~68)、SK05 (69~74)、SK20 (75~78) 出土遺物



土壙 SK10出土遺物



土壙 SK40出土遺物

写 真 図 版

Ⅱ 名東遺跡（住宅開発工事）



北東より

瀬原谷田状況



竪穴住居跡 SA01検出状況

南西より



竪穴住居跡 SA01検出状況

北西より



竪穴住居跡 SA01遺物検出状況

南西より



竪穴住居跡 SA01遺物検出状況

北西より